397
78

397-78

帝國圖書館藏

將棊の秘訣

全

花外先生著

平和堂發行

大正
9. 12. 18
内交

はしがき

一、本書は將棋界諸名士の後援を得て著者多年の苦心研究の結果完成したものであります

一、本書は初學者に最も必要な將棋の定跡に就て特に親切に講義を致しました

一、二枚落以下の定跡などは他書に餘り類を見ないものであります

一、それで好棋家が本書を座右に備へて其の秘訣極意を會得したなら力量はメキメキ上達しますし初學者にとりては此上なき好き師匠であることを斷言して憚りません

一、書中の指方番號は見誤り易いものでありますから念の爲め左に委しく書いて示して置きます篤と熟覽の上充分記憶を願つて置きま

す

將棋盤面に次の圖の通りに番號を書き入れて本と對照すると非常に宜しい

大正九年十二月

著者しるす

盤面番號圖

	一	二	三	四	五	六	七	八	九
一	一一	二一	三一	四一	五一	六一	七一	八一	九一
二	一二	二二	三二	四二	五二	六二	七二	八二	九二
三	一三	二三	三三	四三	五三	六三	七三	八三	九三
四	一四	二四	三四	四四	五四	六四	七四	八四	九四
五	一五	二五	三五	四五	五五	六五	七五	八五	九五
六	一六	二六	三六	四六	五六	六六	七六	八六	九六
七	一七	二七	三七	四七	五七	六七	七七	八七	九七
八	一八	二八	三八	四八	五八	六八	七八	八八	九八
九	一九	二九	三九	四九	五九	六九	七九	八九	九九

將棋の秘訣 目次

將棋の上達は先づ定跡を學ぶにあり……一
上手下手の說……四
將棋對局の心得……一〇
對局の初め……一六
平手相懸り……一八
平手中飛車　向ふ先手……三一
平手中飛車　其二……三六
双方平手中飛車　其三……三七
平手先手中飛車　其四……三八
平手相櫓……四二
櫓崩し……四七
筋違角はめ手……五一
石田懸り……五三
石田懸り　其二……五五
横歩取り……五七
四間飛車……六一
四間飛車　其二……六三
四間飛車　其三……六五
四間飛車　其四　先手四間はめ手……六六
二枚落　五五歩留の破格……六九
二枚落　多傳又は他傳……七二
香車落……七八
左香落　はめ手……七八
六枚落より四枚落まで……八一
六枚落　第一……八二
六枚落　第二……八三

六枚落　第三……八四
五枚落　左桂一……八四
五枚落　左桂二……八五
五枚落　左桂三……八六
五枚落　右桂一……八七
五枚落　右桂二……八八
五枚落　右桂三……八八
四枚落　一……八九
四枚落　二……八九
四枚落　三……九〇
四枚落　四……九一
四枚落　五……九一
四枚落　六……九二
四枚落　七……九三
四枚落　八……九三
四枚落　九……九四
四枚落　十……九五

（目次終）

將棋の秘訣

將棋の上達は先づ定跡を學ぶに在り。

將棋は勝つのが目的でありますが、一人で爲ることゝ違ひ向ふに相手のある仕事でありますから我が思ひ通りに計りは參りません、相手がたも亦勝のを目的として居ますから何れか一方が負けることゝなります、故に唯勝ことばかりを考へて居ますと甘く行つて一勝一敗と云ふことになります然るに若も一方が勝ことばかり考へ居るのに對し一方は勝ことゝ負けぬことを考へて居ますと其方が考へが二重でありまして唯勝つ事ばかり考へて居る單想の人よりも自から成績が好くなりまして三度指す中には二度勝つ道理となります、斯申せば勝つと云ふことも、負けぬと云ふことも同じ結果で別段二重の考へと云ふ譯はあるまじと云ふ人もありませうが決してさうでありません唯勝ことばかり考へて居るのと、勝ことゝ負けぬことゝ二重に考へて居るのは大に異なる處があります、之を戰爭にたとへて見ますと勝ことばかり考へて居る時は所謂猪武者となりまして思はぬ不覺を取ります、先づ敵を攻るのは自分の陣地を定めて地の利を占めるのが第一であります陣地が堅固で備へが完全して居りますと萬一攻擊が成功せずして逆襲を受けることゝなつても十分に防戰が出來ますから終に敵を擊退して再び攻勢を取ることが出來ます又敵が何れの方面より迂回包圍して來ても防備して守ることが出來ます之れ卽ち負けぬことを考へた戰ひであります、然るに勝ことばかり考へて陣地も定めずに猪武者的に攻め込みますと途中で伏兵に遇ふこともあります、敵に後を斷れることもあります、俄に本營を崩さるゝこともあります、假令や又中途に故障がないにしても萬一攻擊が成功せずして敵の逆襲に逢ふ場合となりますと忽ち全軍の敗れとなつて蹈み留まることが出來ません、故に能戰ふものは勝つことばかりを考へずに負けぬことも考へて萬一の時の備へをして置きます、之れは譬論ばなしでありますが將棋

も其通りでありまして無暗に駒をくり出して敵を攻撃するばかりでは若し成功せぬ時は駒損ばかり出來て一端防ぎとなりますと忽ち崩されて玉將が頓死するやうの事があります、故に敵を攻撃するにも一面には自陣の備へを亂さぬやうにして萬一逆襲を受けても喰ひ止めるだけの用心をして置かなくてはなりません然らば其方法は如何と申しますれば戰爭に陣法と云ふものがある通り將棋にも「定跡」と云ふものがあります陣法は代々の名將が研究したものでありまして軍隊を出すには必ず此陣法に依りますのでありますが將棋の定跡も代々の高段が研究を重ねたものでありまして攻めるにも守るにも之れに依れば俄かに崩れるとか頓死するとか云ふ不覺のことがなく力一ぱいに指せます、定跡には何れも駒と駒との連絡が出來て居りまして亦何れの方面にも隙のなきやうに出來て居るものでありますから敵の逆襲を受けても之を防ぐの道があり又迂回包圍を受けても各方面にて應戰することが出來るのであります、因て勝つことばかり考へて定跡に依らずに向へばかり進むのは過ちが多くありますが勝つことを考へる外に負けぬことも考へて定跡に依て指すものは自から安然であります之定跡を學ぶべき第一であります次に又戰ひをするには攻撃の地點を選むのが肝要であります、若し敵の全力をそゝひで守つて居る處を目懸けて攻め入つても其功が少くして却て損害が出來ます將棋も敵の備への堅固なる處から仕懸けて行ても容易に崩れませんから陣地を布てのちには何れの地點が最も攻撃に便利であるか、敵陣は何れの方面が薄弱であるかと云ふことを見定めて後に其處より仕懸けるのが棋法でありまして定跡は之を敎へてあるものであります、たとへば平手の先手は居飛車でさすとか後手は四間飛車にふりて戰ふとか角落には角を五筋に引くとか香落は端より仕懸けるとか何れも利益の指し方に依つて敵の陣の薄弱なる處から攻め入ることに敎へてあります之れ定跡を學ぶべき第二であります

陣地を布き駒組をするにも敵の駒くばりを見定めなくてはなりません敵にかまわず我は我で一定の駒組をして居たのでは却て敵に先じられまして早崩しと云ふ奇計に落ちます故に敵の駒配りに注意して之に應じて防ぐにも攻めるにも第一番に利益の定跡に依つて我も亦駒組をせなくてはなりません之がために定跡には種々の異つたものがあるのでありまして之を能く腹に入れて居りまして敵の駒配りを一々注意しつゝ臨機應變に最も利益の備へ即ち駒組をするのが攻守ともに便利であります初心の中は此臨機應變に暗く敵の模樣に拘はらず自分の勝手に駒を組みますから定跡に組んで居ては却て負るなどゝ申しますので其實は定跡の種類に暗ひからであります能く敵の駒配りに注意して之に應ずるやうに此方も駒組をして行けば決して無理に敵から崩して來ることは出來ません之れ定跡を學ぶべき第三であります

扨將棋の極意は敵の玉將を詰ると云ふにあるので少しにても隙があらば旗下へ切り込んで一手でも早く玉を詰れば夫が即ち勝でありますから互ひに一手々々と指して居る中にも何處かに隙はないかと云ふことに注意することを怠つてはなりません若し敵が駒組に順序を過つて空虛の處を生じたとか又は無用の緩漫の手を指して居て此方に響のないと見たならば直ちに先手を取つて切り込むことを考へなくてはなりません、然るに初心の中は兎角、駒を取ること計り第一として玉を詰ることを第二として居る人のあります故に手に駒を一ぱい持て却つて詰られることがあります下手將棋玉より飛車を可愛がるのたとへの通りであります此玉より飛車を可愛がると云ふことは自分の飛車を可愛がるのを云つたものでありますが下手將棋となりますと自分の飛車ばかりを可愛がるのでなくて敵の玉を詰ると云ふことよりも敵の飛、角を取ることばかりを考へて大事の持駒を惜氣もなく打つて敵の飛、角を追かけ却つて不利益に陷ることがあります譬へば働かず居る敵の飛、角を追ひ廻して却て其飛、角を捌かせて世に出して働かれるやうなことがあります且つ之がために自分の持ち駒を打て仕舞て大事の時に敵を詰ることも自分を防ぐことも出來なくなることがあります大に注意すべきであります

上手下手の説

將棋に上手と云ふのは駒を落した方であつて下手と云ふのは駒を落された方であると云ふことは別に説明するまでもなく誰も承知のことゝ思ひますが其段割と駒割の双方の損徳を順序として説明いたします、先づ一段の相違卽ち初段と二段では半香又は香平交りと申しまして一番は香落、二番目は平手を指します最も平手の時は必ず初段の方が先手であります、而して香落ちには左香落と右香落がありますが近年は多く左香落のみを指します、元來香落は其定跡が頗る六ケしきもので今日までの棋士でも能く之を研究しつくした人が無い程でありまして如何なる指し方が必ず下手の利益であると云ふ見極がつきませんから二段違ひの力では立派に香落ちの傷みより攻め込むと云ふ定見がつきません且つ上手には香の無いだけに之を取られる心配がありませんが下手は動もすると香を取られる手が出來て却て不利益を招くやうなこともあります之がために香落は下手に取りて頗ぶる指し悪い將棋としてあります、然しながら上手には兎も角も香車が一つ不足して居るのでありますから幾分か傷みがあつて其處から指さるゝ時は是非受け身となつて大抵は其處から崩るゝことゝなりますから下手方が能く定跡の變化を極めて居る時は必ず香だけの徳はあります、特に左香を落した方が上手に取つて苦痛であつて下手に利益でありますから現今は多く左香を指すのであります、右香は上手が居飛車で指せますのみならず先手で指しますから一手徳で平手との差別が甚だ少ないのであります然れば一段違つても其力に於て甚だしき相違のない時などには右香を指しまして確かに一段だけの相違があると思ふ時には一度は平手を指すかはりに一度は左香を指しますのがよろしいやうであります況して二段違ひ卽ち初段と三段と云ふことになりますと常香又は素香と申しまして何時も香落ばかりでありますから大抵は左香を落すことゝなります、前に申す通り香落將棋は頗る六ケしくて下手が必ず利益の指しかたがあると云ふ定跡が研究しつくしてありませんのに右香では益す下手の損となりますから少しでも下手に利益の左香を落してもらふのが下手の利益であります、尤も往時は二段違ひでも一度は左香、二度目は右香を落して指したものでありまして道理から云へば左右交る〳〵落して指すのが當然でありませうがそれでは下手の損でありますから實驗の結果現今は左香のみを指すことゝなつたのであります、且つ左香は研究しつくせぬ程でありますから其變化が多くて局面が極めて面白くなりますので好んで之を指すのでもありますが何分香車一枚で二段違ひと云ふことは下手に取つては不利益の駒割でありますので近來は又一工夫して上手から一歩を讓つて二段違ひで香々角など云つて角落を一番交て指す人もあります香々角とは香落を二番に角落を一番都合三局を以て一勝負とするのでありまして第一局は香落で上手に多少の利があり第二局は角落で下手に大に利があり先づ之を指し分けと見て第三局の香落を以て勝負を決すると云ふ次第であります然し之は昔よりの駒割には無いことで近來棋士同士で合意の上にて指すものでありますが序でゆゑ記して置くのであります、扨右の通り香落は下手の損の駒割でありますから、半香卽ち香平の交りで互ひに指して居ります中には下手が平手を勝つて香落を負けると云ふやうな現象が澤山出來ますので若し香を落されて勝負が五分々々にゆけば其人は殆んど平手に近いのであります況て香落を必ず勝つやうになりますと平手でも勝こむ位の力があると見て差支なく決して段の違つた處がありませんから四番も續いて香落を勝た上は最早平手に直して指すのが當然であります因みに申しますが公然段のある人は何時も駒割が定つて居るから是非もありませんが普通は四番手直と申しまして四番つゞいて勝つた時は駒割を直して一段上げて指すのが常の習ひであります尙ほ左、右香落の詳きことは定跡の講義に入り後に説きますが普通に左香落は上手は六六歩と角道を留めて早く角を替らせぬ指し方をしまして飛車を七八へ廻し或は九八とか六八とかへ振て左

の端を受けつゝ敵の七筋へ手をつけるやうにし自分の玉將は右の方へ移し二八へ座を定め所謂美濃圍ひに致します下手は玉を左へ移し三二へ座を定めて金將で圍ひます之をガンギと申します、而して九筋即ち敵の香の無い處より仕懸けますが双方の普通の定跡でありますが近來能く三筋飛車と云ふことを指します之は下手が飛車を三二へ廻し上手の玉頭より攻かけるのでありまして一寸早いやうでありますが其代り下手も玉を右に美濃圍といたしますから矢張り上手からも飛車を七八へ廻して玉頭から攻めてまゐりますので結局同じ道理となります且つ下手は左香の傷みを指さずに殆んど平手同樣の將棋となつて力指となりますので關根八段などは常に之を尤めて之れでは香落ちの利益がなく上手徳の下手損の將棋だと申されますが畢竟は香落は下手よしと云ふ定跡が見當りませんで動もすると上手に利益の局面となりますので一層のこと力指に三筋を指すのでありまして餘程の力がなくては三筋の損徳を詞別することが出來ません又右香落は上手は玉を左に圍ひ居飛車で指しますが下手は先づ角を替るやうに指し次に一六歩と突きくれて角を三八又は一七、或は二七などへ打ち込むやうに指します、又は一筋へと金を作つて指しますが其なれば下手の利となりますが若し之を過まつて上手に二筋、三筋より早く破られますやうになりますと下手の不利の將棋となります、何れにしても定跡がありまして無法に指しては決して敵を破ることが出來ず却て自分の方へ空虛が出來ますから定跡の研究を忘れてはなりません最もそれ等の定跡は後にいよ〳〵定跡の講義に移りましてから詳しく述ますが以上は誰も知つたやうのことでありますなれども此編は極めて初心の人に見せるためでありますから順序として記して置くのであります

次に二段違ひでありますが之は前に申しました常香又は素香であつて何時も香を落すのでありますから此には略しますが此駒割は大に下手の損のある處からして一說に往時家元保護のためだなどゝ申されました之は民間の棋士に家元の名人に容易に勝せぬためだと申

しますが其證據も御ざいませんから一つの風說として置きます

次に三段違ひは香角交りと申しまして一度は角落、二度目は香落であります、之は香車は二段違ひ角は四段違ひでありますから香角を一度づゝ指しますと丁度三段違ひとなるのであります元來角落は四段違ひでも大に下手に德の駒割でありますのに之を三段違ひの力で指すのでありますから大抵は下手の勝であります其代り二段違ひでも六ケしい香落を三段違ひの力で指しますのですから香落の方は大抵上手の勝となりますので此三段違ひの將棋は兎角勝負のつきにくい駒割であります因みに將棋は二番以上の駒割となつて居るものは先づ傷の強い方から初めに指しますのが定例でありまして香平ならば香落を始めに指し、香角ならば角落を始めに指すのが順であります棋士同士が合意の上ならば何れから指しても差支へはありませんが定例を申します時は右の通りであります

次に四段違ひは常角即ち何時も角落であります角落となりますと四段違ひでも上手は大に不利益で下手の德の駒割であります之は角と云ふ大駒がないために上手は少しも隙を與へる事が出來ません若しも早く下手の角に化れるやうのことがあれば忽ち上手の破れとなります且つ角落の定跡は能く研究がつんで居りまして必ず下手の勝べき道理となつて居ります上手は只敵の隙を見て指すより外はなく幸ひにして十分攻勢を取つて居ても一寸した事から反對に攻められる手が出來てまゐります之は好やうでも角が無いと有るの差で突然局面の變化を來すためであります又下手は機を見て角を切り棄てる手が出來ますが角を切るからには必ず金銀の中を手に入れ且つ指し込む隙があるからでありますから上手は角を取つても之を用ひぬ中に詰められるやうなことがあります、故に上手は先づ入玉の心で自分の方を安然の地位に置かない中は容易に仕懸け惡いものであります然るに下手に定跡の研究がつんで居りますと殆んど必勝とも云ふべきでありますから角落は大に上手の損の駒割でありまして古來の名人でも角落

は勝ち惡いことゝしてあります扨角落の定跡は下手が玉を右へ移し八二へ圍ひ銀を頭(八二)へ冠つて飛車は三二又は二二などへ廻し角を五筋又は六二へ移して戰ひます上手は之に對して玉を右へ移し四七又は三八などへ圍ひまして飛車を引て六九、八九などへ廻し敵の玉頭から攻めるのを本定跡としてありまして此外に下手が玉を左へ移し矢倉に圍つて居飛車で指します時は上手は玉を左へ移し七八へ置て飛車は居飛車又は四筋へ廻して指すことがあります此二つが先づ角落の定跡であります、詳しき事は後に定跡の講義の時に申します

次は五段違ひで飛角交りであります卽ち一番は飛落、二番目は角落であります角落は四段違ひでは上手が損でありますが五段違ひで丁度よろしき處と思はれます而して飛車落の方は元來六段違ひでありますから五段違ひの手合せの時は上手が損で下手が德のやうでありますが妙なことには此飛車落の定跡が角落ほどに下手の德のやうに研究してありませんで動もすると下手に損の指しかたとなります、それは上手に角を替つて右の方へ打ち込まれて化込まれることゝなり香車を取られるか或は飛車を左の方へ追ひ込まれる手が出來ますので却て角落より指し惡いことがあります此本定跡は下手が玉を左へ移し三二、又は二二へ圍ひ銀を二三へ盛り上げ金を四二、五二へ並べ右方は銀を六筋よりくり出して五四へ上り飛車を六二より六一へ引き桂を七三へ上つて指しますと上手は玉を右へ移し二八又は三八へ置て銀を五七、六七へ盛り上げ右の金を四八、四七と進め左の金を七八卽ち角の腹へ置くのが普通でありまして下手は六筋の歩を突き出し六五で桂を替り且つ角を替るやうになりますが此六筋の歩の突き出しが六かしいので早くていけず遲くていけず其機會が大事で之を過つときは上手に角を打ち込まれ之を利用して荒されるのであります之も詳しくは後に定跡講義の時に申し述べます

次に六段違ひは當飛車で前に申した通り下手の利益とも云へぬ駒割であります然し飛車と云ふ大駒が無いのでありますから上手は指し惡いに相違ありませんから下手に實際に三段の力がありとすれば名人(九段)に對しても指せぬ事はありませんので畢竟は下手に勝ちの込むべき駒割でありますが六段も違ひますと上手は種種まぎらしき手を指します上に前に申す通り飛車落の定跡は角落ほど研究がつんで居りませんからやゝもすると下手が指し惡くなります要するに六五歩の突き出しの機會さへ研究すればよろしいやうであります

次に七段違ひは飛車に一挺半の交りであります之は一度は飛車を落し一度は飛車と左の香を落すので、一挺とは飛車を指し半とは飛車と香落を云ふのであります飛車落は前に申す通り六段違ひでも必ず下手の利益と申されぬ程でありますから七段違ひでは多少下手が損でありますが飛、香落となりますと大に相違いたします既に段割に於ても八段の差があるのを七段の差で指すのでありますから之は下手の利益なる道理でありますのみならず上手には飛車の無い上に左の香がないのでありますから左の方には先利きの駒が一つもありませんから下手が九筋卽ち端より仕懸けて參りますと大に防ぎ惡いことゝなります故に此定跡は下手に大に利益のやうに研究されて居りまして下手は敵の左の方より飛、香、桂、角などで一齊攻擊を取ります且つ上手は角を替つても反對に下手に打ち込まれる恐れがあります之は香のないためであります

次に八段違ひは一挺半、卽ち飛香おちであります之は前に申します通り上手は先き利きの駒がないのでありますから下手に初段の實力がありますれば九段に對しても指せる將棋であります、此外二枚落ち以下は段に入りませんから後に定跡の時に申すとして此に略します

併しながら上手が下手に對しますと强ち段割りに依らず九段も六段も同じやうに下手を扱かふこともありますから段の餘り懸け違つた手合では一樣に前記の駒割を以て力を定めがたいこともありますが之は下手が定跡に暗ひ故に上手にまぎらはせられるのでありますから定跡は心得べきであります

將棋對局の心得

將棋を指すには將棋の腹が肝要である指の先きの仕事ではない定跡が陣法であれば腹を拵へるのは策戰である因て對局に豫め心得て置くべき事を示す

○駒の運用　將棋の駒はそれ〴〵特殊の働きを以て居るから其性質に從つて運用しなくてはならぬ人間にたとへて見ても外交に巧みな人を內勤に使ひ事務的の人を外交に用ゆる如きことでは双方ともに功績を擧げることが出來ぬ、將棋の駒も之と同じやうで內を守るべき駒と進んで戰ふべき駒とがあるから其性質に依つて巧みに運用するのが肝腎である先づ金の如きは玉の側に居て內陣を守るべき駒で銀は進んで戰ふべき駒である高段者の棋譜を見ても金は餘り動ひて居ぬが銀は頻りに出入して居る飛、角の如き偉大の働きを以て居る駒も必ず銀の援けを得て始めて働けるのである桂、香の如きも桂馬は進んで敵陣に逼ることが多く又は取りかはつて打ち込む場合が多くあるが香車は自陣の端を守つて動かずに居る、一寸考へると香車は先き利きのする駒であるから闘士のやうに思はれるが其實は守備隊であつて端より崩さるゝ場合でなくては容易に動かずに居る、但し之を手に持つた時は一種の詰め道具であるから無暗に打つてはならぬ之を手にして居れば十分敵を脅迫することが出來る桂馬も容易に手放してはならぬ之は第一の詰め道具であつて飛角で詰め得ぬ處も桂で詰める事の出來る場合が多くある三桂あれば詰みがあると云ふほどのたとへもあるから桂馬を持たならば之を利用するに注意し又敵の手に桂馬のある時は用心しなくてはならぬ素人の中は能く桂馬の褌を懸けたがるものであるが見込みもなく金、銀などゝ交換するために褌を懸けては我に利なき計りでなく却て敵に利器を與へることゝなる一番の將棋には必ず桂馬の爲めに局面の變動を來たす場合があるから能く時機を見て飛び大勢を察して打ち込まなくてはならぬ次に飛、角の運用は最も大事である若し飛角の中を陣中に封じられて働けぬことゝなれば其將棋は大抵負けとなるのである故に角道は成るべく早く明けて敵陣へ透して置

くことが肝腎である飛車の筋も縱橫に通して置くやうに駒を配置し機があらば敵地へ化込む手段を講じなくてはならぬ飛車の頭へ銀を置き橫へ歩を並べて置く如きは極めて拙なるものである素人の棒銀と云つて能く銀を飛車の頭へ進めて行くが本筋の將棋には無いことで銀は大抵三筋（飛車の左鬢）又は五筋から出て行くのである而して成るべく飛先きの歩は替つて手に持つことにして居る最も四筋から上ることはあるが飛先き卽ち二筋から上ると云ふのは無筋である而して飛車を中段に進めた時は橫の歩を進めて飛筋をズツと橫に通して置くのが法であつて大家の棋譜を見る時は飛車の筋が縱橫に通つて局面に溝を作つたやうになつて居るのがある、それほどまでに行かずとも成るべく筋を通して置かなくてはならぬ又普通のたとへに角は引て利あり飛車は敵地に置て利ありとしてあるが成る程角は化返つて局面の中央より手前に居る時は大に利があつて自陣を守りつゝ敵陣を伺ふことゝなるから五五の角は八方を睨むと云つてある又飛車は敵陣の二段に化込んで居て敵玉の側面を伺ふ時は利益が偉大であるが自陣へ引て守るやうになつては功用が少なく大抵は負け將棋の形となる、それから玉將は左右何れへか圍はなくてはならぬ居玉で指す時は形勢の變動によつて頓死することがある計りでなく敵を攻めるにも自陣が不安であつて十分の決戰が出來ぬものである、ケレン將棋の早指しで勝敗を一笑に付すと云ふのは譽むべきでない玉は必ず圍ふて後に十分の力を盡して戰かつて後に勝敗を決し勝つも負けるも技倆を盡しての上で得心するが將棋の上達法である玉も圍はずに僥倖の勝は勝つても敵が服せぬのである負けても未練が殘つて得心の出來ぬものである次には歩兵の運用である歩の突き出しと打ち込みは最も局面の變動を來すのであるから大に考へなくてはならぬ全局の中には歩の活動すべき局面は幾個處もある、いよ〳〵戰端の開く場合は勿論、亂軍となつても歩の突き出しと打ち込みに依つて忽ち形勢を一轉する如き場合がある凡そ歩の利用は第一つき。くれ。、第二打ちすて、第三つぎ歩、第四。と金を作る、

第五間駒、第六つなぎ、第七なりくれ其他いろ〳〵利用の場がある、之れ等の説明は長くなるから後に定跡講義の際に折を見て説明すること丶するが實に歩の運用は大事のものであるのに始めの中は歩を何とも思はずに無暗に打ち無暗に捨て却て肝腎の時に用ゆることを忘れて居るものである俗に「手をつける」と云ふことがある之は仕懸け處のなきやうに備へられてある敵陣でも歩の突きくれ、づき歩、打ちすて、なりくれなどで其處より手をつけて指し込むことの出來る場合を云ふので大抵の局面は歩に依つて攻撃の端緒をつくるのである此外駒の運用は限りもなくあらうが何れにしても各〳〵その駒の性質を考へて利用することを忘れてはならぬ

○駒の順序　指し初めには何れの駒を動かしても直ちに敵と接せぬため前後の順序に關係なきやうではあるが其實は矢張り順序がある此順序を疎そかにする時は次第に手損となつて先手か後手となるばかりでなく始終受け太刀となつて指し悪いものである故に定跡と云ふものがあつて大抵順序を以て駒を動かし陣を固めて行くのである先づ角道を明けるのは一手で敵陣へ透るからである飛車は角より働きの多き駒ではあるが一手飛先の歩を突ても敵陣へは遠いのに反し角は一手で敵陣まで透る然るに角を替られることを嫌つて角道を明けることを怠る人がある之は損の指しかたである次には居飛車で指すならば飛車先きの歩を突ひて次第に進めて此歩を取りかはつて飛先を透し且つ一歩を手に持つことを考へる次には金を角の腹へ上り次には右の銀を左へ斜めに上り、それより玉の圍ひにかゝり次には五筋、三筋の歩を突きて桂銀の上り道をつくり又は端歩をついて敵の端を攻める時の用意と自玉の萬一の逃げ場を作ると云ふ順序である、それより以下にも皆順序があるので之を一々説明するは容易でないから之れは定跡の講義にゆづり兎も角駒を動かすには皆順序のあることを注意することだけを記して置く

○待つた　將棋を指すに「待た」をする人があるが此癖は改めなくてはならぬ何時でも待たが出來るものと思ふと考へが疎かになる故に駒は一度手から放しては置き直すことも出來ぬものとして手を下さぬ中に十分考へるのが上達の法である何なる場合にも決して待たをしてはならぬ

○待ち駒　俗に待駒と云つて敵玉の逃げ道へ駒を打つて道を塞ぐことがある素人は之を穢ない手と云つて嫌ふが之は決して尤むる手ではない却て必勝の能き手である自分の方が餘裕があるから此待ち駒が打てるので畢竟は勝ち將棋に出來て居るからである然るに待ち駒が穢ないと云つて無暗に玉手々々で追かけては切れ將棋となつて却つて負けることがある且つ詰めるにしても一手でも早くつめるが法である若し玉手々々で詰め得らるゝのを讀み切れたらば其時は待ち駒をしてはならぬ、一手すきでなくては詰ぬと見たらば待駒で必死をかけ早く詰めるが法である戰爭で云へば伏兵である伏兵を尤める戰術はない故に待ち駒は決して尤める手でない術語では之を「しばる」と云つて大家の將棋には能くある手である、然し前に云ふ通り玉手々々の詰のある場合には如何に餘裕があつても待ち駒は穢ないのである能く讀んで見て直接に詰めなくてはならぬ

○全局に注意せよ　將棋を指すには一方にのみ目をつけてはならぬ必ず始終全局面に注目して居なくてはならぬ自陣を通觀して敵に乘じらるゝ缺點があらば此に備へ敵陣を見渡して少しにても乘じ得らるゝ隙があらば其處より攻めかけることを忘れてはならぬ始めの中は兎角一方へのみ目を集注して無益の戰爭をして居るものである之がために遠くの方から飛角のために我駒を素拔にされることもあり玉手、飛車取をかけられることもあり之に反して敵の駒を素拔にする手のあるも見つけず早く玉を詰める手のあるも心づかずに駒を取つたり取られたり手數ばかり多く指して居ることがある、いよ〳〵混戰となつたならば何れにか攻撃點のあるものであるから能く全局に注目して少しでも早く敵玉に近き處から攻撃を取るのが法である大家の將棋は手數が少なく素人の將棋に却て手數のかゝるのは此攻撃點を見つけるの早いと遲ひとのためである故に對局

中は常に前後左右へ目をくばり全局面を胸中に見透して居ることを忘れてはならぬ

○牽制　牽制とは右を攻めると見せて左をせめ、左を攻める如く見せて實は右に心あるのを云ふので戰爭にも此法を能く用ゆるのである始めの中は能く一方のみから攻めて果しのつかぬことがある故に一方を攻めて敵の防備力を此方へ移させたる後は急に方面を轉じて他方面より攻撃するのが早き勝ちを得ることゝなる、たとへば敵が美濃に圍つてある時は玉の左から攻めて果してのない時に急に右の端の方から攻むる時は左の方は始めの防戰のために玉の逃げ道が塞がつて居て却て脆く右の方で詰めらるゝものである故に左の方は程よくして玉の逃げ場さへ塞げばよいので直ちに端歩をついて攻かゝるのは能く大家の將棋にある手である此妙機は逸してならぬから雷美濃圍ひばかりでなく何の將棋にでも之を利用すべきである

○大駒を切る　飛角は容易には捨てられぬが然りとて之を大事にして玉の危きも知らず又敵にかゝり得らるる際のあるも知らずに居てはならぬ機を見ては飛角と雖も捨て顧みず思ひ切つて敵の金銀と替るか又は敵の取るにまかせて先手で仕懸ける場合を考へなくてはならぬ諺に云ふ玉より飛車を可愛がるやうでは段々と指し込まれて負け形となつて其時に飛角を捨ても間に合はぬ事となるのである又敵の飛角ばかり狙つて玉を詰ることを忘れて居るのも同樣であるから飛角は切り捨てる機會を考へなくてはならぬ

○重い手、輕い手　將棋に重い手と輕い手と云ふことがある實地でなくては能く說明が出來兼ねぬるが多く駒を打つ場合などに自分の打つた駒が邪魔になつて飛角の働きを妨げることや又敵玉の周圍に迫つて居ても玉手をかけるに順序の惡いことなどがある又飛角を動かしても筋が惡ひと急用に立ぬ事などがある之れ等は重い手であつて之に反し駒を打たず局面に在る駒を一寸動かして自玉の進退が廣くなり又は敵玉の自由を縛るとか但しは飛角の働きを助けるとか云ふ場合がある之を輕い手と云ふのである故に持た駒を打つ時は成べく其利害を考へ打ずに濟む場合は之を手にして居る方が數倍の利益であつて攻守ともに大事の時の要となるのである

○駒を捌く　自家の駒は成るべく働らけるやうに其進退の道を明け且つ何れも攻守の役目に參加させるやうに配置するのを駒を捌くと云ふのである或る駒が遊んで居て守りにもならず戰鬪にも加はらず隱居して居るやうでは負けの原因である飛角金銀は勿論、一歩に至るまでもそれ〴〵任務に就て居る時は大なる利益である故に局面に遊び駒や隱居駒の無いやうに捌いて行くことを忘れてはならぬ

○高く組むと低く組む事　歩を突き上げて其下の三段目へ金銀をくり上げ駒を高く組む場合と餘り歩を突き上げずに金銀を低く二段へ組むことゝがある飛角を早く替る將棋は高く組む時は打ち込まれる恐れがあるから低く組むを利とするが然りとて敵が歩を突きあげて來るに低くばかり組んで居る時は所謂位負となる恐れがある之れ等のことは追々と定跡講義に入つてのちに實例を擧つゝ說明する事にいたさう

○形を見よ　中盤以下となれば局面の形に依て最早詰みのあることが知れるゆゑ屢々局面を通觀して大局を考へなくてはならぬ

○姿を直す　局面には姿と云ふことがある姿の惡き時は遊び駒や空虛が出來る、故に何かの順序で局面の姿が亂れたる時は機を見て之を直すのが肝要である譬へば金が上り過ぎた時は之を引て陣中の固めを好くし又離れて孤立の駒が出來た時は動かして繫ぎをつける如きものである常に陣中は整然と駒を配置して一方へのみ固まるは宜しくないが然りとて餘り離れ〴〵となつては連絡の取れぬ事がある、大家の將棋を見るに駒はバラ〴〵として居ても各々繫ぎがついて居て素拔をされることもなく又重なり合つて窮屈の處もなく各駒ともに居るべき處に居て各其部面の守となつて居て自から姿の惡しくなる憂もがない然るに初心の中は他の連絡もかまわずに調子に乘つて一方のみ進退するので忽ち姿が崩れて指し惡しくなるものである

對局の初め

將棋盤は正しく据へ上手方又は後手方が上座に座り駒箱の蓋を開ひて盤上に駒をあけ玉を取つて其座に並べます之に次いて下手方又は先手方も玉より並べ始め左右の金、銀、桂、香、飛、角、歩と云ふ順序に並べ了りて下手又は先手方より一禮し上手又は後手方も答禮して指し始めるのが禮法であります

因みに將棋盤の製法を記します舊時將棋所（卽ち家元）の定法としては左の通りでありましたが近年は厚き盤を用ひて五寸より以上のものもありますが普通四寸より五寸までか格好がよろしいやうであります之に反し近來の盤は竪横が狹く一尺に一尺一寸位のものがありますが之は本寸ではありません木地を吝んで狹くするのでありますから正しくは一尺一寸に一尺二寸くらゐに作らなくてはなりません木地には色々用ひますが榧に越したものはありません次には銀杏、桂などでありまして其他は好みません欅などは固くて肩へ答へる恐れがあり其かと云つて軟かき木では傷が出來て忽ち醜くなります榧を貴ぶのは榧は駒を打時に音が好きばかりでなく少しの傷は自然に浮き上つて消る特長があり且つ匂がよくて目方も輕いなどゝ云ふ色々の出色の點があります最ともよろしいのは日向産としてあります之は目方の輕いと云ふことであります併し他州の産でも榧ならばよろしいのであります扱寸法は何れも曲尺で

竪一尺二寸三分○横一尺一寸二分五厘○厚さ四寸二分○足高さ二寸九分五厘○總高さ七寸一分五厘

であります普通は

竪一尺二寸○横一尺一寸○厚四寸○足三寸

でよろしいのであります又駒は柘植に限ります柘植は音の能き上に用ゆるほど光澤を生じて妙趣が出てまゐります象牙、紫檀などで作るものがありますが一の玩弄物に過ぎませんで實用には柘植を第一といたします文字には金龍、眞龍、水無瀬、安清、會津形などの種類があります金龍、眞龍は大橋家で製造

した駒で一は市川米庵、一は松本董仙の書であります水無瀬は豐太閤が水無瀬大納言に書したものと傳へてあります安清は其人不明でありますが文字の形が正しく能く駒に適應して居りますので近來最も多く用ひられます將棋新報社で製造して居りますのは之を模して一層見よくしたのであります會津形と云ふのは筆者は不明でありますが行書で頗る達筆でありますが行書だけに雅致はあつても尊嚴を缺て居るやうであります以上が將棋の駒の大體でありまして柘植へ彫刻して漆を入れて其上を再び盛りあげて文字を高く書たやうにいたします此外に山形から出來てまゐります安駒には種々の木を用ひてありまして文字も例の一種變つた下の方を丸く書たのでありまして之は彫刻せず直に漆で書ましたもので極めて疎末のもので荒物屋などで賣てゐるものであります

それから、いよ〳〵指し初めます時には駒台又は鼻紙の折たのを右の方へ置きまして取た駒は此上へ置く用意を致します駒を手に握つて居るは笏黨のやることで黑人は取つた駒は必ず駒台又は鼻紙の上へ正しく置て彼我とも一目瞭然にいたして置きます、然すれば敵の駒を聞く失禮もなく又數へ違ひすることもありません

で第一に體裁も能く手垢がつかずに清潔でもあります

手合駒割は段の定まつて居るもの又は豫じめ話しの出來て居るものは格別、然らざる時は一段違ひならば香落ちを初めに指します何によらず交りの駒割りには先づ駒落ちの方卽ち傷みのある分より指すのが習慣としてあります平手ならば歩を振て先手後手を定めますが普通は駒を振つた人の方を歩としてありますから直振ても歩が出れば振た人が先手であります而して先手が七六歩と角道を明けるは普通でありますが然りとて無意味に指し始めるは宜しくありません先づ對座の初めに於て今日は何なる駒組に依つて指んかと云ふことを胸中に定めて其方針を以て駒組をいたすべきであります「始めから考へる」と云つて笑ふ人もありますが實は始めが肝腎で手を下さぬ中に其日の策戰をいたすのは最もよろしきのでありますから急いで指し始めるには

及びません十分考へてから角道なり飛車道なり明けて指すのが本意であります此外いろ〳〵説明いたしたきこともありますが餘り前文か長くなりますからいよいよ定跡のお話に移ります

將棋には六枚落から平手までありまして天野氏の精選には六枚落から始つて平手を末に出してありますか普通は平手を多く指しますので本篇には平手から始めまして六枚落は末に出します

平手　相懸り

平手將棋には種々の定跡がありまして之まで將棋新報へ其講義を出しましたが第一といたしますのは「相懸り」でありますが此相懸りの定跡も度々新報へ出しましたが今回も順序として之を出します但し之まで新報へ出しましたのは本筋だけの定跡でありますが本篇は前にも申せし通り初心者へお話しでありますから本筋の傍ら素人將棋の無筋咎めを付記しまして參考といたします因て多少指せる人には分り切つたこと〻思ひます

が之は極の素人で新報の之までの講義では未だ六ケ敷と云ふ讀者にお話しするのでありますから其つもりでお讀みを願ひます

相懸りの將棋は其名の如く互ひに同じやうに指して行くのでありますから先手は何處までも先手で利益たるには相違ありませんが一手緩漫の手を指す時は反對に後手から攻めらるゝ事となり頗る危險の將棋でありまして動もすると勝負が早く濟みます、夫がため棋士中でも恐れて之を指さぬ人があります特に後手方は一層恐れて多くは角道を留めて四間飛車を指したがるのであります、然し相懸りほど正々堂々として且つ變化の多き將棋はありませんから尤も興味に富み且つ力のつく將棋であります、故に故人の定跡には多く此相懸りの研究を遂げてあります、一言に云へば相懸りは先づ將棋の根本と云つてもよろしいのであります

先手方第一に角七六歩と角道を明けます之は毎度定跡講義にあります通り一手で直ちに敵陣まで見通す手でありますから角のある將棋では何時でも此七六歩が最初の手でありますが何かすると角道を明けずに始めに二六歩と飛車道を明ける人もありますが之は變體であります尤も角を七九へ引いて烏指と云ふ定跡で指す時に角道を明けず指す事もありますが（其定跡は後に出します）之れも後手方ならば兎も角先手ならば矢張り角道を明けて居飛車で戰ふのか利益であります且つ此定跡は相懸りゆゑ七六歩と突くのが第一の手であります、後手方も角三四歩と突きます之も相懸りのためばかりでなく直ちに敵陣へ向ふ手でありますから利益の手であります此時直に先手方より二二角なると角を替る人がありますか此角替りは先手の損としてあります、其ゆゑは二二角なるを同銀と後手が取りますと銀の上つたゝけ一手德になりまして先手も八八銀と上れば直ぐ後手が先手の形となり先手は反對に後手となります同じ力の將棋ならば先手になつた方が利益でありますのに態々角を替つて後手になると云ふのは不利益に定つて居ります、而して先手方が角を替つた目的を何かと思ひますと八八銀と上らずに直ぐに四五角と打ちたがるのであります之は筋違角と申しまして無い手ではありませんが之も利益の手ではありません卽ち後手方が五二金と上りましたとき三四角と歩を一つ取りましても其後容易に此角を化る事が出來ませんで中途に立ち往生して居るやうなことゝなります、且つ後手方からも六五角と打たれる時は矢張七六の歩を取られ其上に先手では銀が上つて居りませんから一手後れます又先手で四五角と打つた時に後手方五二金と上らずに八五角と打てば先手は六三へ化れませんから矢張り三四角と歩を取れば後手も七六角と歩を取り先手は又四三へ化ませんで却て八七へ敵角を化られますから八八銀又は七八金と上つて防ぐことゝなりまして矢張り先手が後手となり互ひに角を打ち込んで歩一つづゝを取つたゝけで先手が後手と爲つた丈が損であります此筋違角の定跡も後に詳しく説きますから此に留めて置きますが兎も角以上の通り先手から角を替るは一手の損で筋違角を打つのも同樣一手の損となりますだけでありますから後手方も恐れずに三四歩と角道を明け

るのが當然で、明けたからと云つて先手が角を替りに行くのは不利益であることを會得して置くべきであります尙ほ申しますが先手が角を替つて四五角と打つた時は後手も八五角と打てば後手が先手となるだけの德はありますが夫よりも矢張り五二金と上つて置けば三四の歩を取らしても先手の角は容易に化れませんから後手は角を手に持つて居て時機を伺ふのが大に利益であります八五角と打つたのでは先手となつたゞけの德でありますが手に持つた角は何處へでも打てますから敵に隙きのあり次第勝手の處へ打つて化ます、故に敵は角の打み込みを恐れて容易に歩の突き出しが出來ず大に苦みますから其暇に此方は追々と位を取つて指し込んで行けます總て手に持つた駒は何處へも利くと云ふほどの强味がありますが一度打つて仕舞つた駒は其道だげの利でありますから功用は少ないのであります因て持ち駒は持ち腐れにしても不利益でありますが無暗には打たずに好機を伺ひつゝ敵を脅迫して居るが大なる利益であります、然すれば此筋違角も先手に三四の歩を一つ取られても後手方は角を打たずに手に持つて居るのが却て利益でありまして先手は角を替つても打つて仕舞つたゞけで化れず後手は何時でも勝手の處へ角を打つと云ふ權利を持て居りますからくれ〳〵も二二角の替りは不利益でありますから七六歩に對し三四歩は恐れず突くのがよろしいのであります以上は相懸りに對し先手七六歩と突き後手も三四歩と突ひた二手につきて素人筋の角替り、筋違角の損德を說明したのでありまして再び本文に戻りまして第三手目より說きます因みにお斷りいたして置くのは指し手の頭に(先)(後)の印のあるのが本文の手で印のないのは枝道の說明でありますから混合せぬやうに印を辿つて御覽を願ひます

第三手目先手方の(先)二六歩と突くも相懸りの定法でありますが何の將棋でも先手居飛車の駒組では三手目に此二六歩を突くのであります(後)八四歩も相懸りの定法であります最も他の駒組みにては後手方は八四歩の飛車道を開けずに四四歩と角道を留めて指すこともあり

ますが之は四間飛又は櫓に圍はんとする時に後手方の指す手で先手は角道を留めることは不可としてありますが後手方も强く指すには八四歩と突居飛車で指すのが正々堂々として居ますが後手だけに同じ力とすれば一手後れて居るだけ居飛車の仕懸け合ひは受太刀となりますので後手の時は二八歩を突かずに四四歩と角道を留めて後に飛車を四間又は袖飛車に廻るのも宜しいのであります但し本講義は相懸りでありますから同じやうに八四歩と突いたのであります次に(先)二五歩も相懸りの定法であります敵が櫓に圍つた時に二五桂と飛ぶために此二五歩を突かぬこともありますが其他は既に二六歩と突ひた上には此二五歩も突ひて置くのが定法であります後手方も(後)八五歩と突くのが相懸りでありますが尤も八四歩を突かず後手が四四歩と角道を留めてある時は先手に三四歩と突ひて歩を替らせぬために三三角と上る處でありますが之れは相懸りで角道が留めてありませんからお互ひに飛先の歩を替るため損德なしとして後手も八五歩と突ひたのであります此時若し角道の開たまゝ三三角と上つて二四歩を突かせまいとすると忽ち負けとなります卽ち三三角を同角なると指され同桂と取れば直に二四歩と突かれ防禦の策がありません、因て八五歩と突くのが當然であります次に先手方は(先)七八金と上ります此金を上らずに直ちに二四歩と突くこともありますが然すれば忽ち力將棋となつて激烈の戰ひとなり動もすると先手方が危險に陷ります其手段は追々講義致しますが兎も角之れは餘り好みません且つ此處は相懸り正法の說明でありますから普通に七八金と上ります後手方も同じやうに(後)三二金と上つて置きます次に(先)二四歩(後)同歩(先)同飛(後)八六歩(先)同歩(後)同飛は別に說明を要しません此處で先手方が横歩を三四飛と取りますと所謂横歩取りの定跡となりまして中々面倒の講義となりなすから矢も後のことに讓り此には普通に(先)二六飛と引きます(後)二三歩と打ち(先)八七歩(後)八四飛と引きます此飛は後手方は八二へ引くこともあります、

右の飛車の引き方につきては普通は双方とも中段の處へ引きますが後手方は時に依りてば八二飛と下の方へ引く法もあります先手方は何ゆゑ三六飛と中段へ引くに定り後手方は下へ引くことがあるかと申しますと先手方は一手づゝ先でありますから三六歩と突き三七桂と上つて後に三五歩と突て仕懸けることゝなります此時飛車が下に居ては後手が其歩を取らずに反對の方面から七五歩と突ひて參ります之を同歩と取れば先手が後手となり七七歩と打ち込まれて受け方となります因て七五歩を乗て置て三四歩と取つて行げば三六歩と打たれ桂を逃げれば三七歩なると飛車の小鬢へと金を作られて敗勢となりますから飛車を二六に引て置きますと三五歩と仕懸けて敵が同歩と取つて來たらば三三歩と打ち込み敵が三五歩を取らずに七五歩と突ひて來ても構はず三四歩と取つて進み次には三三へ化込む手段がありまして後手は飛車が二六に居るために三六歩と桂の頭へ歩を打つことが出來ぬのであります故に先手は三五歩の仕懸けを含んで居るために是非とも二六飛と引て置くのであります若し先手で二八飛と引ひたならば之は三五歩と仕懸けぬ手段でありますから後手方は之を看破して反對に仕懸けることが出來ます且つ二八飛と引ひては相懸りの正法でなく他の駒組と變じますから此處は正法通り先手は二六飛と引ひて三五歩と仕懸ける含みにいたして置きます而して後手方は何ゆゑ八二飛と下へ引くことがあるかと申しますに後手方は七五歩と仕懸ける暇がなく敵に先手で三五歩と仕懸けらるゝ事となりますから中段へ引ひて置て桂頭に歩を打たれるを防ぐ必要がありません、そればかりでなく後に角を替つてから先手に六六角と打たれて飛車へ當てられる手順となりますから豫め之を避けるために下へ引くこともあるのであります、然し下へ引ひた飛車と中段へ引ひた飛車では其功用は中段の方が大に勝つて居ります下へ引たでな働きが自陣の中だけでありますが中段に居れば場合によりては七筋へも五筋へも三筋へも廻られて横に自陣の境界を守ることが出來ます且つ下へ引て居る時は敵に桂を持たれた時に八六桂

と打たれて次に七四へ飛んで桂馬の褌を懸けられます故に下へ引いた飛車は六六角と當てられぬ代りには働きが少く又二六桂と打たれる恐れもあります斯の如く利害が何れにもありまして何れが利益かと云ふことは俄に定めがたいのでありますが兎も角後手は七五歩の仕懸けをする含みでありませんから八二飛と下へ引くこともある次第であります又八二へ飛を引ひて居れば先手は三五歩と仕懸けても後に六六角打がありませんから大に趣きが異てまゐりまして横歩取りなどに變じて相懸りの正法が崩れて力將棋に移りますから此講義には正法通り後手方も八四飛と引ひて置ひたのであります、尚ほ舊き定跡には角が替つて六六角と打ち八二飛と逃げて後に先手へ桂が取次第、矢張八六桂と打つて次に七四へ飛び褌を懸ける手段がありますが之れは中ころ一つの妙手を考へまして桂が先手へ入つた時に後手は八六歩と打ちます先手は此歩を取らずに居れませんから同歩と取るために八六桂打の手段は消滅して仕舞ひましたから今では最早八六桂打は恐れることが無くなりました、以上にて飛車の引き方につきては説明が濟んだと思ひますから次に本文の手へ移りまして先手方は(図)四八銀と上り後手方も同じやうに(図)六二銀と上ります此銀の上りにつきてゐ一應お話しがありますから説て置きます

黒人の將棋は相懸りばかりでなく何の將棋でも右方の銀は四八、六二へ上りますが素人の將棋には能く此銀を三八とか七二とか飛車の腹へ上つて其れから更らに飛車の頭へ出て二筋、八筋から戰ひを挑みますが之を棒銀と唱へ功用甚だ少ないものとしてあります最も黒人の將棋にも稀には飛車の腹へ上つて出て行く事もありますが之は十番に一番位のもので所謂奇謀でありまして好んで指す手ではありません故に黒人では之を馬鹿銀と云つて一の變則としてあります又素人の指すのを見れば下手の棒銀など丶嘲笑するのであります併し素人連は此棒銀を能く指したがりまして又此受け方に困難して居る人もありますが之は受け方に手落があるためで若し手順よく備へますと此棒銀は折角出て行て

も忽ち退却させらるゝ事となります之を防ぐには後手ならば先づ櫓に圍つて玉を二二へ金を三二へ銀を三三へ角を四三へ備へて置けば先手の棒銀は何の働きも出來ません其手順は後に出す櫓圍の定跡を見て參考と致せば宜しいのであります最も先手が手順に構はず一氣に棒銀を出て參りましたならば後手方も多少手順を變更して兎も角も銀を三三へ上り左の金を三二へ上り角を三一へ引て四二へ上り夫より玉を二二へ操り更らに右の金を四三へ運ぶ手順を考へればよろしひのであります敵の出次第で色々前後はありますが兎も角手數を讀で見て右の如く銀が三三へ金が三二へ角が四二にさへ居れば先手の棒銀は功用が無く折角出て行つても忽ち擊退されるのであります之れだけで既に先手が後手となりますから同じ力ならば棒銀を出た方が損であります、それでも尙ほ此銀を利用するために先手は角を七九へ引き五六の歩を突きそれより再び三五歩と突て歩を替つて此銀で取り後手が三四歩と打つた時に先手が二四歩と突ひて同歩、同銀、同銀、同角、同飛と

此に歩、銀、角の大替りをすること、なりますが後手に二三歩と打たれ飛車が三四飛と横歩を取つては敵に銀、角がありますから二八角打などで先手は至極危險に陷りますので矢張二八飛か二六飛と引くこと、なり駒には損德はありませんが先手が後手となつたのみならず先手は棒銀を動すために多く手數の損をして居りますので玉の圍ひが出來て居りませんに反し後手は其暇に十分に自陣を固めることが出來ます因て此銀は四八、六二へ上るのが正法でありまして棒銀に立つのは無筋であります次に本文へ通りまして(先)五六歩(後)五四歩(先)六九玉(後)四一玉の次に先手方(先)五九金と指しますと後手方も同じく(後)五一金と指します之を五一金の定跡と申します先手では五九ではありますが向から數へる時は矢張り五一に當りますので双方とも一と口に五一金と唱へてあるのであります而して此金は先手は大抵五九へ寄りますが後手方は此金を五二へ上ることがあります之を五二金の定跡と申します斯先手後手にて指しかたの少し異る所以を又々左に說明いたします

先手方が五九金と寄る含みは矢張り前に述べました三五歩の仕懸けの手段を爲さんがための用意でありまして其次第は次に說きます手順の通り後手方へ飛車を渡しますから其時に二九飛と打たれても直に王手とならぬために五九金と玉の腹へ寄つて置くのでありまして之れならば二九飛と打たれても構はず先手で敵へかゝつて行けます之に反し後手方は七五歩と仕懸ける含みでなく敵方から仕懸けられて其結果次に說く如く先手方に二一へと金を作られまして又三三へ桂を化れることゝなりますから此三三へ桂を化れても直ちに玉の小鬢へ逼られぬ爲めと玉を五一へ寄つて行く爲めとで始めから五二金と上つて居るのであります尤も五一金でも敵が二一歩なると指した時か三一。と呉れに來る時に構はず五二玉と逃げて居ても差支へはありませんから五一金でも甚だしき相違はありませんで其利益の何れにあるかは丁度後手が飛車を八四へ引くがよいか、八二へ引くがよいが俄に定めがたいと同樣でありまして中々研究の屆かぬ處でありますから舊來の定跡にも

兩樣がありますので可否の斷定はつけずに置きます、要するに自分の每々指して能く呑み込んだ方が指し好くなりますから其好む方に依りて屢々指して見るのが一番の利益であります次に(先)三六歩(後)七四歩(先)三七桂(後)七三桂と之れまで双方同じやうに駒組みが出來上りましたから之れからが仕懸けの手段であります

先手は兼て含みの通り(先)三五歩と突き(後)同歩と取ります後手方は之を取らずには居れません次第は若し取らずに居れば三四歩と取り込まれ次に三三歩なると指されまして結果は同じで歩を一つ損をしたため大に危險であります然りとて他に後手から仕懸ける手はありません七五歩では順々に一手づゝ後れてまゐりますから結局負けとなりますので此三五歩は同歩と取るより外はありません次に先手方(先)三三歩と打ちます此三三歩の打ち込みの手段は今日にては後手方に種々研究がつみ第一前に說きました八六歩の打ち棄てが發見されて八六桂の打ちが消滅しましてからは殊更らに此三三歩の打ち込みは先手方に損の定跡の如く思はれて參りま

したが然りとて必ず不可と云ふ程に後手方の研究が進んだと申す程ではありません之よりも外に穏かなる手段があるべしと云ふ位の處でありますから巧く指しますと先手方は少しも敵に猶豫を與へずに先手々々で勝つことが出來ます且つ舊來よりの定跡は何れも此三三歩を打ちますので先手の研究もつんで居りますから正法通り三三歩と打つて挑戰いたします後手方は之を▲同金と取ります之を同桂と取りますと先手は五五歩と突き同歩、同角で歩を一つ手にして三四歩と打ちますから三三の歩は桂では取れません或は初めに一筋の歩が突ひてあれば先手から一五歩と突き同歩、同香、同香と先手は香を一つ損をしても歩を持つて三四歩と打てば矢張り大に利益でありますから後手は何れにしても三三の歩を桂では取れません然らば角で取つては如何と云ふに同角なる、同桂で先手に角を持たれて其上先手に歩が渡れば三四へ打たれます尤も後手も角があるから一五へ打つ手もありますが先手が同角なる、同桂の次に一六歩と突て居る手もあります之れでも後手

は指す手がありませんで先手は次に一五歩と突き前記の如く香を棄て歩を手にする時は三四歩と打ちますから後手は不利益になります後手は直に角を替らずに一六歩と指して先手から角を替らしても同結果となります、因て正法通り三三の歩を同金と取りますのであります▲同角▲同角▲二三飛なる▲三二銀▲三三龍▲同銀と取ります之れ等の順序は一番好き手順を擇んだもので此外の手で縦令へば先手が龍を客んで逃げて居ては後手に二二歩と留められても飛車を化たゃけで金角を替つた損があります又後手から二二歩などの溫き手でなく九九角なると指され七七桂と逃げて見た處で敵角を封じたやうなものゝ其角は化て居て且つ手に角、香を持つて居らるゝから大不利となります又後手方も敵に二三飛なると指された時に二二歩と打ちますと三三龍、同桂、三四歩で桂が死にまして次には先手に四五桂の飛びもありますから何しても前に記した本文の通り飛、角、金の大替りが双方の手段を盡した順序であります

倘ほ後へ戻りまして三三歩打ちまでに色々の手段がありまして變化が説きたいのでありますが、それを此で説きますと復雜して初心者には却て分り悪くなりますから此は三三歩打より起る順序を引き續き一筋に説て參りまして此處が一通り濟みましてから後に改めて三五歩突きより變化を述ぶることゝ致します、扨前には飛、角、金の大替りまで説きましたから之より續ひて先手方の手段を説きます、即ち先手方▲二二歩と打ます此歩は同銀とは取れません取れば六六角で飛と銀へ當てられますから桂は見す〳〵取られても致しかたがありませんで四四銀とか二九飛打とか指します之れは何れを先にしても甚だしき相違はありません即ち假りに二九飛と打つて見ますと先手は二一歩なると指します後手方は外の手を指して居ては矢張り六六角と先手方に打れまして八四に居る飛車と三三に居る銀へ當てられますので是非とも四四銀と上るより外ありません然すれば二二歩と打たれた時に直ちに四四銀と上り二一歩なると指された後に二九飛と打つても同じ手順となります因て此には二二歩に對し▲二九飛と打つて見ます此で前に申した通り先手方の金が五九に寄て居りますので此飛は玉手になりませんから先手方は構はずに二一歩なると指します、此で後手方は先手に六六角を打たせぬ爲めに四四銀と上ります此四四銀上るの手で後手方が四四角と打て敵の六六角打ちを豫防する人がありますが之れは研究の結果面白くないことになりました即ち先手は此角に構はず四五桂とでも飛んで居りまして後手が九九角なると香を取りて化ますと七七桂と上つて後手の角は化ても當分封じ込められて働らけません此角は手に持つて居て後に一五角とでも打つ方が大に功能があります、斯して九九へ化た角は働きがつきませんで後手の桂が三三の銀へ當つて居りますから四四銀と出ると三三桂と化ます此桂は取れません取れば又々先手六六角打がありますので桂に化れただけ後手の損となります因て四四角打の手は無筋でありますから四四銀と上るのが宜しいのであります此で先手には一五歩の突と三一と一一との數手があります

一寸斷つて置きますが後手方が八九飛とか四四銀と上る前、卽ち桂を取れた後は直ちに八六歩と打ち同歩と取らして置くのが先に申しました八六桂打ちを防ぐ妙手であります之は是非打つべき手で先手も之を取らずには居られませんから後手も手遲れになる恐れがありません因て此歩を打ち棄て後に四四銀でも八九飛でも指してよろしいのであります而して後手が八九飛でも四四銀でも何れにしても先手は前に述べました三一。とか一一。とか一四歩の三手の内を指すのが順序であります此中で一四歩は後手方に一五角と打たせぬ豫防でありますが之は手溫いやうでありますから一一。と香を取つて見ます、香を手に入れゝば大に德でありますが其代りと金が遊びますから之も考へものであります因て三一。と寄るのが面白いやうであります此と金は同玉と取ることは危險であります卽ち三三桂なると指れて尙ほ先手に金を持つて居られては甚だ指し惡くなります若し四一玉と寄れば四三成桂で結果銀を取られる手となりますから後手は始めに三一。とを取る手はありませんで五二玉（五二金の圍ひならば五一玉）と逃げるより外ありません、之れより後に先手の指す手は三三桂なるの手でありませう而して後手は一五角打ちか一九飛なるなどでありませう之に對し後手一五角ならば六六角と受けて四二の銀を繫ぎます八二飛と逃げて先手番であります又後手が一五角でなく九一飛なると香車を取つて居れば先手は六六角を打たずに三三に居る成桂か三一に居ると金を徐々と働かせる考へとか色色の手があります以上が相懸三三歩打の策戰でありまして此後は双方の手腕によりますのでありますが要するに先手は何處までも先手を失はぬやうに指すのがよろしいのであります因みに先手より六六角と打たれた時に後手方八五飛と進む人がありますがそれでは七七桂と飛ばれて一手損であります又九四飛と寄つては飛車が危くなり且つ場合で七二金と先手方に縛らるゝ手なども出ますから飛車は八二へ引くのがよろしいのであります又先手も機があつたらば六八銀を上つて玉の備へをすることも忘れてはなりません

以上で三三歩打ちのことは大略述べましたから次に三五歩つきからの變化を少々述て置きます

第一變化　三五歩つきより（圖面參考）

㊊三五歩は㊥同歩と取ります此時前章本文では三三歩と打ちましたが此局面は改めて㊊四五桂と指して見ます棄てては三三歩と打たれますから㊥四四歩と敵の角道を留めつゝ桂を取れと參ります㊊二四歩と打つ之は取らずに居られませんから㊥同歩と取る㊊同飛㊥二三歩㊊四四飛と强く指す之を後手方同角と取れば飛角は替つても先手の角に一一へ化れます二二銀では六六角打、八二飛、二二角なる、同金、同角なるで後手は助かりません何れにしても先手に六六角の繫ぎ打ちで飛車を追はれ且つ後手の左の方を荒されますから此四四飛を同角と取る手はありません因て㊥四三歩と留めます㊊五四飛と指す之を棄て置ては五三桂となられますから㊥五二歩と受けます、そこで㊊三三歩㊥同桂と取ります此處四二金よると逃げては二四歩と打たれて飛車に化れる手となりますから同桂と取るより外はありません㊊同桂なる㊥同金と取る之より㊊三四桂㊥四四金㊊二二桂なる㊥五四金㊊三一成桂㊥同玉㊊一一角なると指して居て結局先手方の勝となります

第二變化　同じく三五歩より

今度は後手方、三五歩を取らずに同じやうに㊥七五歩と突て見ます先手三四歩と取つて行つても先手だけの德はありますが後手から五五歩と留めさせては面倒に

第一圖㊊三五歩の局面

持駒　先手歩　後手歩

	九	八	七	六	五	四	三	二	一
一	香				金	玉	銀	桂	香
二				銀			金	角	
三	歩		桂	歩	歩	歩	歩	歩	歩
四							歩		
五					歩				
六		歩	歩	歩		歩	桂		
七		角	金	玉	金	銀			
八		桂	銀						
九	香								

なりますから先手から(先)五五歩と切ります(後)同歩と取ります同歩と取らずに同角と替る手もありますが後手だけに角を敵に持たせては損でありますから同歩と取つたのであります(先)七五歩と飛車道を横に通します後手方も(後)三五歩と同じやうに指します(先)七六飛は七四歩とつく含みであります之を防ぐために(後)三六歩と指し(先)同飛と取らせんとしますが之を同飛と取ると八八角なる、同銀で先手が後手になりますから(先)四五桂と飛んで敵に近づきます(後)三四飛は三筋を防ぎつゝ三七歩なると指んためであります先手方は四五に桂が居るだけ敵玉に近いので三七歩なりを構はずに(先)七四歩と指します(後)三七歩なるは(先)同銀と取ります此手で七三歩なると指しては一手遅れますから先づ銀を切つたのであります(後)同飛なる(先)七三歩なるの次に後手方に受けて指す手と仕懸ける手があります先づ受けて見ますと七三歩なるを同銀と取ります同飛なる、六二銀打、八二龍、五六歩、五四桂打にて後手は防ぎ兼て先手の勝となります因て後手は先手の七三歩なるの時に受けて居ては足りませんから強く敵の七三歩なるを棄て置て四八銀と打つて仕懸けて見ます、先手六二○と銀を取ります後手五九銀なる、同玉と取る、六二金と指す、七一飛なる、五一金、五四桂打で矢張り先手の勝となります要するに先手には四五桂が居るのと桂徳となつて居りますから後手は一手づゝ早くなつても結局負けとなりますのであります

第三變化　圖面の三五歩を突かず三七桂、

七三桂の次ぎより

今度は互ひに桂を上つてのちに先手方三五歩の仕懸けを一手後にして(先)一六歩と突き後手(後)一四歩と受け(先)九六歩(後)九四歩と指した時に(先)三五歩と突きます之は後に至り先手方が端にて歩を一つ手に入れる手段でありまして其順序は下に述べます、三五歩は矢張り(後)同歩と取る、そこで(先)一五歩と突く(後)同歩と取る(先)三三歩と打つ(後)同金と取る此時前には同角と取つた手と四五桂と飛ぶ手を説きましたが今度は後手方が同金と取つた時に(先)一五香と切ります(後)同香と取る(先)四五桂と飛ぶ(後)三二金と引く此で端で取つた歩を利用して又も三三歩と打ちます(後)同桂(先)同桂なる(後)同金と取つた處で今度は四五桂と打たずに(先)三四桂と角に當て打ちます此桂を金で取れば二二角と後手は角を取られますから(後)一一角と逃げます(先)三三角なると金を取り(後)同角(先)二三飛なる(後)九九角なる(先)八八銀(後)八九馬(先)二一龍で後手の角は化つても使ひ道が薄く先手の飛は功用が多く結果先手の利益であります總じて角は前に引ひた方が効用が多く飛車は敵陣へ化つた居て大に効用があります、角と變り香損となつても先手が利益となるのであります最も先手が三四桂と打つた時に後手方一一角と逃げずに(後)四四桂と打つて先手の角道を留める手もありますが然る時は(先)二二桂なる(後)同銀(先)二五飛(後)一四歩(先)三五飛(後)三四歩(先)二五飛と戻つて力將棋となりますが先手は桂、香を捨ても角を取つて居ますので勿論指し好き道理であります

此外にも相懸りの手段は澤山ありますが之は既に屢々將棋新報にも講義を出しましたから御參考あるべく其中でも「大橋家將棋秘傳記」と「無筋答將棋經」などに種々の變化を記してありますから之につきて詳しく研究をするのがよろしいことゝ思ひます此篇は極初心者のためでありますから一と通りだけを出しましたのであります又相懸りより横歩取りに變化する定跡が澤山ありますが之は横歩取りの定跡として後に改めてお話しをいたします

平手中飛車　向ふ先手

中飛車は黒人は餘り指しません最も左香落の將棋には落した方が敵に左の端の香の傷みを指せぬために中飛車を指すこともありますが平手では指すことは甚だ少ないと云ふことは之れまで將棋新報へ出しました古今の棋譜を見ても分る處であります又時たまに指しても後手方の指すことはありますが先手方は殆んど指しません、之れは先手方は居飛車のまゝで指すのが一番利益であるからでありますが後手方は受ける方でありますから飛車を四間に廻ると同様に飛車を中へ廻つて

所謂中飛車を指すことがある次第であります、然るに素人になりますと之が反對に最も好んで中飛車を指します香落に限らず後手に限らず平手の先手で中飛車を指したがるのが多さやうであります　諺にも「下手の中飛車、上手の居飛車、力ざしなら四間飛車」と申す程でありますから中飛車は本筋の定跡ではありませんが然りとて世間で多く指すからには之を説く必要があります因て將棋新報でも數回講義を出しましたが何分古今の定跡と云ふものが少ないので十分には參りません今回の此篇は最も初心者のためでありますから初心者の一番に指したがる中飛車を十分説て見たいと思ひまして色々定跡書を調べましたが多く見當りません其中で福泉藤吉氏と金親玉歩氏との藏書の本社へ傳はつた中に二つ三つ發見しましたから之を出しまして次には之まで將棋新報へ出した中飛車の講義を取りまとめて簡短に出しまして初心者が中飛車を指したがる參考といたしたいと考へます併し之は參考に出すのでありまして決して中飛車を勸めるのではありません成るべく先手は居飛車、後手は居飛車でなくば四間、三間飛車などを指すのがよろしきやうに思ひます、扨いよいよ講義に移りますが之れとて後手の中飛でありますから益々先手で中飛車を指すの無筋たることが明らかであります但し之は向ふ方が先手となつて居りますから盤面を其つもりで御覽を願ひます

先手方は居飛車で指すために(先)三四歩と角道を明けます後手方(後)五八飛と卽ち中飛車に廻ります(先)八四歩と居飛車で飛先を突きます(後)五六歩と中の歩を進めます此歩と五八飛の廻りは何れを先にしても相違はありません卽ち三四歩、五六歩、八四歩、五八飛と廻つても同じことであります次に(先)八五歩と進む(後)七六歩と角道を明けます之れは七八金と上つて居て後に角道を明けても大した相違はありませんが形がよろしいので先づ角道を明けたのであります(先)八六歩(後)同歩(先)同飛(後)七八金と上ります(先)八四飛と引く此で八七歩と飛先を留める手もありますが、それでは八八角と角を變られて紛れが多くなりますから後手方(後)五五歩と敵の角道を留めて指します此五五歩(甲)に對し先手方は八六歩と打つ變化がありますがそれは後に説くことゝいたしまして此には(先)六二銀と上つて先陣中を備へて敵の中飛を防ぎます(後)五四歩と突く(先)同歩は已むを得ません(後)六六角と打つ飛車を逃げて居れば二二角と化れて銀を取られますから(先)八九飛なると桂を取つて化る(後)二二角なると銀を取つて化る之れでは後手方が指しよき分れであります最も先手方が飛車を八二に引て居ります時は六六角打がありませんから其時は角を替らずに他の手を指すのでありますが此には八四飛と引た時の指しかたゞけを示したのであります次に前に述べました五五歩(甲)に對する先手八六歩の變化を説きます

後手方五五歩の時に先手方(先)八六歩と打ちます後手方は外の手を指して居ては八七歩なると指れますから(後)六六角と出て飛車を追ひます(先)八二飛と引く(後)八八銀と出る(先)六二銀と備へる(後)八四歩と飛先を留める此にまた先手方で七四歩(乙)と桂、銀の出道を開く手もありますが、それは後にいたしまして(先)五二金右と益々堅固に中央を守ります(後)七七銀と上ります(先)七四歩は銀、桂を捌く通路であります(後)八六銀と歩を取ります

第二圖(後)五五歩の局面(甲)

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香	桂	銀	金	王	金	銀	桂	香	一
							角		二
歩		歩	歩	歩	歩		歩	歩	三
	飛					歩			四
				歩					五
		歩							六
歩		金	歩	飛	歩	歩	歩	歩	七
	角	銀		玉	金	銀	桂		八
香	桂							香	九

持駒　先手歩　後手歩

向先手　前後手

(先)七三銀(先)八五銀と指しまして後手方位勝ちでありますから此後敵の模樣を見つゝ早く仕懸けるか又は後手方も陣地を備へるか何れにしても後手方が指しよろしいのであります

前章には後手方が乙圖の如く八四歩と打つた時に先手方が五二金と上つた指し方を説きましたが引きつゝき此には後手の八四歩に對して先手が七四歩と銀桂の道を明ける指し方を説明いたします即ち圖面の次に先手方(先)七四歩と突きます之は云ふまでもなく銀を七三より上つて後手の角を追はんとする含みでありますから後手方もぐつ〳〵して居ては壓迫されますので早く駒

第三圖(先)八四歩の局面(乙)

持駒　双方なし

向先手
前後手

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香	桂		金	王	金	銀	桂	香	一
	飛		銀	歩	歩		角	歩	二
歩		歩	歩	歩	歩	歩	歩		三
	歩					歩			四
				歩					五
	歩	歩	角						六
歩			歩		歩	歩	歩	歩	七
	銀	金		飛		銀	桂		八
香	桂			王	金	金	香	歩	九

の捌きをつけるため(後)五四歩と突きます(先)同歩は已むを得ません(後)同飛と取る(先)五三歩と打つ此で飛を逃げて居ては後手となりますから(後)二二角となる先手方五四歩と飛車を取つても敵陣へ打ち込む處がありませんで自陣は一一馬と香を取られても二一馬と桂を取られても指し惡くなりますから飛車を取る手はありませんで(先)同銀と化角を取ります後手は此でも飛車を逃げて居ては機會を逸しますから強く(後)五五角と打ちます(先)八四飛と浮く後手方飛車を三四へ逃げて居ては機會を失するから飛車を見捨て、(後)二二角となる(先)五四歩と飛車を取る(後)一一馬(先)四四角は筋でありまして後手方之を捨て置て二一馬では先手に八七歩となられし結果金、銀二枚と角を替られ其上に飛車を化れて結局負けとなりますから四四角を(後)同馬と取ります(先)同歩の次に(後)四三角と打つ(先)四五角と打つ後手方此角を二七へ化れるを恐れて三八銀と上つて居ては先手に八七歩となられ同銀と取れば六七角なる、同金、八七飛なると指されますから二筋は捨て置て(後)五二金と上つて防ぎ

ます先手も二七角と化て居ては見す〳〵桂を取られますから一旦は三三桂と逃げます然すれば後手方は銀、飛を替つて攻めて見たが先手に能く防がれて結局角を只化するだけで早くも切れ形となります且つ先手には二七の角なりがあります後手が之を防ぐために銀を上つて居ても先手の手に飛車がありますから油斷が出來ませんで結局先手のよろしき形となります因て先手方は乙圖面の八四歩の後に前章の五二金上るを已めて七四歩と指すのがよろしいのであります又無暗に飛車を取らずに能く前後を察して防ぎつゝ徐ろに指すのがよろしいのであります

然しまた後手にも指し手があります即ち八四歩に對して先手が五二金を止めて七四歩で巧みに防ぎましたから今度は後手も策戰を變て先手の七四歩に對し五四歩の仕懸けを止め此方も溫順に(後)七七桂と上つて敵の角筋を止め且つ自分の角頭を防ぎます(先)七三銀と含み通り上る(後)六五桂(先)六四銀(後)五三桂なる(先)同銀と取る其處で(先)五四歩と突く之れでは先手が惡しく後手がよろしき形であります右の如く双方に虚々實々、一手々々に勝敗の分れがありますから宜しく暗記して敵の利に落ちざるやう我利を考へて指すのが上達の道であります

尚ほ又後手方の五五歩の時に双方で玉を圍つて溫和の指し方があります試みに始めより記しますれば(先)三四歩(後)五八飛(先)八四歩(後)五六歩(先)八五歩(後)七六歩(先)八六歩(後)同歩(先)同飛(後)七八金(先)八四飛(後)五五歩と指して後に(先)六二銀(後)四八玉(先)三二金(後)三八玉(先)四一玉(後)九六歩(先)五二金(後)七七桂(先)七四歩(後)八五歩(先)八二飛(後)九七角(先)九四歩(後)八八銀(先)九五歩(後)同歩(先)同香(後)八六角(先)九九香なる(後)同銀(先)七三桂(後)八八銀(先)八五桂(後)六五桂と指しまして後手が指し好きのであります、つまり先手から八五桂と飛んだ時に後手が同桂と取りますと同飛と取られて先手の望みにはまりますから態と外して六五桂と飛ぶ時は先手の桂は遊び駒となり後手の桂は五三へ利て居りますから場合によりては之を五三へ化棄て五四歩とつひて仕懸ける手が出來ます總じて桂の

飛び合ひは取つては損の處が多く敵の桂を外して反對の方へ我が桂を飛ぶ處に妙味がありまして何の將棋にも能く出來る形でありますから參考として置くべき處であります

平手中飛車（其二）

中飛車は先手が指せば却て先手が後手となる形ゆゑ後手方に巧みに受けられますと先手が不利に陷ることゝなります故に高段の人は先手では之を指しませんことは前章に詳しく述て置きましたが初心の中は兎角中飛車を指したがりまして又之を受けるに苦んで居るやうであります、此に續ひて出しますのも後手の中飛車につき先手の受けて利益の指しぶりを說ひたものでありますが斯申せば受け方ばかりでなく先手中飛車の攻め方も出したらば如何との注文もありませうが毎度申す通り先手は成るべく居飛車で指すのが先手の効能が見ゆるのでありまして中飛車へ廻つて居てはそれだけ一手の損となつて先手の効を失ひますから同じ力で指せば中へ廻つた方が不利になるのが當然であります故に先手中飛車の利を說くのは無理でありますから何しても受け方の利を說くことゝなります若し先手で中飛車の利益ありとすれば駒落將棋に上手宜しの定跡を說くやうなもので結局無理に落ちて却て笑ひを受けることとなります因て此に出しましたのも後手中飛でありますす後手は毎度申す通り三間、四間へ飛車を廻つて指すことも澤山ありますから中飛卽ち五間に廻るのも大した相違ひのないのであります扨本文に移りまして先手(先)三四歩と角道を明けるのは普通の定跡であります次に後手(後)五八飛と中飛に廻ります(先)四四歩と角路を留めたのは先手としては弱ひやうでありますが敵が早く中央より攻擊して來る模樣があるので銀を四三へ上る準備であります(後)五六歩(先)三二銀(後)五五歩(先)四三銀は何れも含みの通りであります後手は敵が四三銀で中央を防ぎましたので俄かに戰端も開けませんから(後)四八玉と玉の圍ひにかゝります(先)四二飛と廻る(後)三八玉(先)六二玉(後)四八銀(先)七二玉(後)六八銀(先)六二銀(後)六六歩(先)八二玉(後)六七銀(先)七二金(後)九六歩(先)九四歩(後)二八玉(先)五二金(後)三八金(先)一四歩(後)一六歩(先)六四歩(後)七六歩(先)六三金左(後)四六歩(先)七四歩(後)三六歩(先)七三桂(後)四七銀(先)三二飛(後)五六銀左にて双方の駒組みが出來ました之より先手方から仕懸けの手に移りますが先づ後手方の玉に近き處よりして(先)三五歩とつきます(後)同歩(先)同飛(後)三六歩(先)三二飛は普通であります(後)二六歩と駒を盛り上げる準備をいたします(先)三四銀と負けずに出て參ります(後)二七玉(先)二四歩(後)三七桂(先)三三桂(後)六五歩と角を利かせます(先)同歩と取る(後)五四歩と益々角道を明ける之も(先)同歩は已むを得ません(後)四四角と出る(先)五三銀(後)八八角引く(先)四四歩(後)三五歩(先)四三銀と引く(後)三六銀と盛り上つて後手方位勝ちであります此末は後手は四筋よりの仕懸けがありますから大に指しよいのであります

双方平手中飛車（其三）

今一つ福泉氏と金親氏の遺しました双方が中飛車に廻つた指し方を出します卽ち說明を省きまして其駒のみだけを示しますれば

(先)三四歩(後)五八飛(先)五二飛(後)五六歩(先)五四歩(後)六八銀(先)三二銀(後)五七銀(先)四四歩(後)六六銀(先)四三銀(後)七六歩(先)六二銀(後)四八銀(先)五三銀(後)五七銀上る(先)六二玉(後)四六銀(先)七二玉(後)四八玉(先)一四歩(後)一六歩(先)三三角(後)三八玉(先)二二飛(後)二八飛(先)五二金左(後)三八金(先)六四歩(後)五五歩(先)同歩(後)同銀(先)五四歩(後)六六銀(先)六三金(後)七八金(先)七四歩(後)九六歩(先)九四歩(後)五九飛(先)八二玉

之れにて後手方が位負けの形であります元來將棋は强弱に依らず先手、後手又は駒落ちで力を平均させてのちに對局させるのでありますから角力とちがひ何れも同じの手合となります角力は大關と幕の內の中ほどでも平手でありますがそれでも立ち合ひが惡ひと大關が負けることがあります況して駒落を以て力を平均させた將棋は立ち合ひ卽ち位負けをしては負け將棋となります故に將棋の位負は第一に忌むのであります

平手先手中飛車（其四）

先手は居飛車で指すが利益で先手から中飛車に廻るは一手損になるから卽ち先手が後手になる形となりますことは前にも申し述べましたが初心の中は一手の損くらゐは然までに關係なく好んで中飛車を指したがりますゆゑ先手の中飛車も講述いたす必要があります因て先年中同盟社の棋士が一度將棋新報へ掲げました先手中飛車の講義へ更らに說明を加へまして再び出すことといたします、然し前にもくりかへして申しました通り中飛車へ廻るは左香落の將棋には定跡もありますが平手で先手中飛車へ廻る定跡は殆んど見受けません程でありますから無論不利益の指し方でありますが之を初心者が指したがり又之を受けるに苦心すると云ふのは畢竟其受け方が惡いからであります、若し受け方さへ宜しきを得れば先手の中飛車は先手が損となつて後手の德となることは高段の棋士は一樣に認めて居りますので此に出しますのも中飛の受け方を專一と致しましたので要するに先手は中飛車を指すのは損である、後手は之を受けて利益であると云ふことを示すのであります、故に定跡としては先手中飛車の利益を說く原理がないと云ふことを頭へ置ていたゞかなくてはなりません扨本文に入りまして

▲七六歩 △三四歩と互ひに角道を明けるのは普通でありまして之は先手が七六歩と角道を明ただけでは何れの駒組にするかゞ分りませんから後手方も何れにも通用する指し方を用ひて三四歩と角道を明けて樣子を伺つて置くのであります、此時先手方は居飛車ならば二六歩と突きますのでありますが中飛車で指さうと云ふのでありますから其含みで▲五六歩と突きます此で人に依りて八八角なると角を替つて同銀の次に五七角と打ち込んで角を空化するものもありますが之は力將棋となつて定跡の講義に依りて損德を述べることが出來ませんで是以後は其人の力次第で勝負を決することとなりますので法にはなりません且つ後手は角を空化しただけで先手に五筋の位を取られ且つ八八へ銀を上

られただけ二手の損があります、のみならず先手に角を手にして居られますから油斷をすると角を打ち込まれて駒を取られる恐れがありますので後手方は駒組に大に苦心を要します、卽ち後手は角を化ただけで未だ仕懸る處がありませんが先手の手に持た角は機を見て何れでも打ち込んで仕懸ることが出來ますから其効力は極めて廣く後手に取つては甚だ不安であります故に此處で八八角と角を替つて五七へ打ち込むことは好みません將棋で後手も矢張り△五四歩と受けて位を保ちます、先手方は含みの通り▲五八飛と中飛車に廻ります此時後手方も中飛で受ける時は五二飛と廻るのでありますが之は別の問題でありまして此には△六二銀と上つて中央へ備へます先手方は直ちに五五歩と戰端を開ひても同歩、同角、同角、同飛でも後手に四二玉と上られて二手も三手も損になりますのみならず力將棋となつて危嶮でありますから先づ▲四八玉と繰ります後手方も溫順に△四二玉と上つて模樣を伺ひます▲三八玉△三二玉は互ひに急がずに陣地を固めたのであります△四八銀は追々に飛先より戰はんとする準備であります△五二金右と上つて敵の目がけて來る中央部を固めます▲二八玉と玉座を定めます此時後手方は陣地が固りましたから機先を制して△八八角なると替りますと▲同銀は已むを得ません△八四歩と突ひて飛先を働かせんと致します▲七七銀と上つて敵の飛先に備へ且つ陣地を廣くいたします▲八五歩は前の含みの通り

△九四歩までの局面

持駒　先手角　後手角

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂				歩		桂	香
	飛	歩	銀	歩		玉	銀	
				金			歩	歩
歩				歩		歩		歩
	歩							
歩		歩	歩		歩		歩	歩
	歩		歩	飛	銀	金	玉	
	桂		金				桂	
香							香	

一 二 三 四 五 六 七 八 九

飛先より迫るあめであります先手方は未だ仕懸る處もありませんから(先)一六歩と突ひて玉の道を廣くして置きます後手も(後)一四歩と受けて位を保ちます(先)三八金と上つて玉を守つて置きます(後)二銀も矢張り玉の守りであります(先)九六歩(後)九四歩も位取であります之れにて双方駒組が出來上りましたから先手方は含みの通り中央より飛先を利用して戰端を開きまして(先)五五歩と突きます(後)同歩(先)同飛は順序であります此時後手は敵の左方面の手薄なるを伺つて此方面より攻め込まんがために(後)九五歩と突きくれます後手方之を捨て置けば敵から九六歩と取つて參りますから九五歩は(先)同歩と取つて置きます後手方は益々手がゝりを作るため(先)八六歩と突きくれます先手方之を同銀と取れば四四角と打たれて飛車を逃れば香を取られて角に化られますから八六歩を同銀の手はなく(先)同歩と取ります後手方隙さず(後)九八歩と打つ先手方之を同香と取れば後手に八七角と打たれて先手方大に不利益に陷りまして之より後は平手の相手即ち同じ力の將棋では後手方の勝となるべき形勢であります即ち先手中飛車は不利益の結果となりましたのであります、然れば双方駒組の出來上つた後に先手から五五歩と仕懸たのが惡い原因となつたから改めて此五五歩の前より他の指し方を研究して見ることゝいたしませうならば圖面の如く組上つた處で先手方まだ戰端を開くのは早いとして尚ほ戰鬪準備のため(先)五七銀と上つて居りますと後手方も同じ心で(後)三三銀と上つて備へをなします(先)四六銀(後)四四銀と互ひに出兵して後に先手方は最早仕懸て宜しきやと又も(先)五五歩と突き懸て見ます(後)同歩は已むを得ません(先)同銀(後)同飛と取つて見ます(後)四四銀(先)五八飛(後)四二金と上つて居て後手方の陣形は大に整つて居りまして却つて指よき形であります

然らば先手四六銀、後手四四銀と上りたる後に先手方まだ五五歩と仕懸ずに尚ほ陣地を固めるために(先)五九金と寄つて居ります後手も(後)四二金上ると固めます(先)四八金上ると益々固めます(後)五三銀上ると五筋へ備へます此で先手は玉の圍ひが出來たから最早中飛を利用して仕懸ては如何と又々(先)五五歩と突ひて見ます(後)同歩(先)同銀(後)同飛と取ります之れでも先手の陣中には隙がありまして(後)七八角と打たれます先手(先)五四歩と打てば(後)六四銀と上られまして飛車に當られます最も此處後手方が四四銀と上れば先手方七一角と打つて飛の替りか又後手の飛が逃れば先手方四四角と銀を取つて角を切る手がありますから後手は六四銀と上つて置くのであります先手方飛車を逃て居ては敵角に化れますから(先)七一角と打つて勝敗を挑みます(後)七二飛と寄つて置きます(先)五三歩なると指します(後)五五銀と飛車を取ります(先)四二と指すのは玉手をかけて角を逃るためであります(後)同金と取るは順序であつて(先)二六角なると指します此時後手方急いで角を化には及びません角は三方へ化ことが出來ますから急がずに先づ自分方の五筋が薄弱であるか四四銀引くと指して居て敵の龍馬の道を留て居るのが當然であります(先)三六馬は捨て置て(後)五二飛と廻り後手方の利であります

又前に戻りまして後手方が五五銀と飛車を取つた時に先手方(先)五二と指せば(後)同金(先)六一銀(後)七一飛(先)五二銀なる(後)七二飛(先)四二金打(後)二二玉(先)八三金(後)五二飛(先)同金(後)四四銀引くにて後手方陣地は荒されましても先手方は最早切れ將棋の形でありますから恐れる事はありませんで後手方は徐ろに指して結局の勝であります

尚ほ參考のため申しますが最初に(先)七六歩(後)三四歩(先)五六歩(後)五四歩(先)五八飛(後)六二銀の時に先手が(先)七七角と指しても後手から角を替つては桂に上られて損でありますから矢張溫順に(後)四二玉(先)四八玉(後)三二玉(先)三八玉(後)五二金(先)六八銀(後)五三銀(先)五七銀(後)四四銀(先)四六銀(後)八四歩(先)五五歩(後)同歩(先)同銀(後)同銀(先)同角(後)同角(先)同飛(後)四四角(先)五八飛(後)九九角なる(先)五三歩(後)四二金よる(先)五二銀(後)五五香打にて後手方がよろしく以上の次第にて先手中飛車は恐れるものでありません

平手相櫓

平手の相櫓は相懸りの中途から變化したものでありますから之れ亦堂々たる駒組みで玉の位置は堅固でありますが其代りには戰ひは猛烈でありませんで順序的であります、之れに双方が同じやうに駒組みするものと一方だけとのがありまして此に相櫓と云ふのは卽ち文字の通り双方が同じやうに櫓に組むのを申します而して一方だけが櫓に組んで之を攻撃するのを櫓崩しと申しますが之れは次に譲りまして此には先づ相ひ櫓から講述いたします此櫓とても一々其變化を申し述べます時は中々復雜して參りますが此篇は極初心者のために駒組を講ずるのでありますから除り込み入つた事は却て紛らはしきことゝ思ひまして單純の處を講ずることと致します扱本文に移りまして

☗七六歩と角道を明けます此で後手方も三四歩と角道を明けるのが普通でありますが人に依りては模様を見に八四歩と飛先きから指す人もあります結果は同じとなりますが之は紛れが多くて説明が長くなりますから後にゆづりて先づ普通に▲三四歩と指して置きます先手方此で角を代つて面白からぬ事は前に屢々申しました通りでありますから☗二六歩と突きます此時後手方も八四歩と突けば相懸りになるか何になるか分りませんから此は櫓に組む含みで▲四四歩と角道を留めて敵に角を代らせずに指す手段を取ります☗二五歩は何れにしても飛先きの歩を代つて置くは德でありますから突きかけたのであります、此で一寸説明して置きますが後手が四四歩と指したゞけでは未だ必ずしも櫓とは定りませんで場合によりては後手は四二飛と廻つて四間飛車を指す考へかも知れませんので二五歩と突き何れにも利用し得らるゝ手を指したのでありますが若し後手が櫓に囲ふことが明らかに分つて居たならば此二五歩は見合て後に二五桂と上る手を殘して置くこともあります然し之れは後手だけが櫓で先手は櫓崩しに指うと云ふ時の事でありますが此には相櫓に指す講述でありますから兎に角二五歩と指したのでありまして此

二五歩は何れにしても損のない手であります後手は毎度申す通り敵に二四歩と突かれては損でありますから▲三三角と上つて歩を替らせまいと指します☗四八銀は何れの將棋にも指す手であります此銀を三八へ上り飛先から棒銀に立ちて仕懸ける事は下手の棒銀と申しまして高段の人の除り指ぬことは前に既にくはしく申し述ましたのみならず敵が櫓に囲つた將棋には此棒銀を上つて行つても結局手損となる計りで再び撃退されることゝなりますから此銀は大抵の場合には四八へ上るのであります、▲三二銀は櫓囲ならば後に角を四二へ引ひて代りに三三銀と上る含みであります又場合ひにより四間飛車に指なくてはならぬことゝなれば此銀は四三へとることゝなりますので三二へ上つたのであります☗五六歩は五筋の位取り旁々此處は金、銀の出入する通路であります後手方も同じ含みで▲五四歩と突きます☗三六歩は後に桂を三七へ上るためと三五歩と突いて仕懸ける含みもあります、後手は追々に櫓の準備で▲五二金右と上ります☗七八銀も後に七七へ上つて櫓に組むべき準備であります▲四三金☗七九角▲四二玉、☗七七銀▲六二銀☗五八金右▲三一玉は何れも櫓に組まんとする含みであります此處で先手方は六八玉と操て順次に玉を八八へ持て行てもよろしいのでありますが先づ先手で角を手にして戰ふ含みで☗三五歩▲同歩☗同角▲三四歩と打たせまして此で六八角と引ひて居て溫順に指す手もありますが劇しく☗二四歩と突ひて直に決戰を挑んで見ます此時後手方決戰する覺悟で三五歩と角を取つたらば何なるかと云ふに然る時は三五歩、二三歩なる、同銀、同飛なるにて後手方角を取つても未だ打ち入む處がありませんで先手には却つて銀を手にして居りますので仕事が出來る次第であります因て此處は三四歩と角を取らずに二四歩を▲同歩と取つて居ります☗同角▲同角☗同飛▲二三歩☗二八飛▲二二玉☗六八玉▲五三銀☗六六歩と指しましてまだ双方に仕懸ける手がありませんから▲八四歩☗七八玉▲八五歩☗六七金▲三三銀☗四六歩▲三二金☗四七銀▲一四歩☗一六歩と指します此で一寸申して置

置ますが此後手方が一四と指した手は既に角が替つて居りますから玉の道を廣くするために指したのでありますが若し先手方の角が其まゝに在つて一三を見通して居り且つ先手の桂が三七より二五へ上つて來る順となりますと端から崩されまして一四歩と究ひてあるだけ直に一五歩と先手につかれるだけ一手損となりますから角の替つてない中に此一四歩は突かぬのがよろしいのであります、次に▲七四歩△八八玉▲九四歩と突きますが先手は九六歩と受ける時は前に申します通り端が一手損となります之は後手は銀が五三へ上つて六四の歩がついてないので場合によりては六四へ角を打つて四五歩と突き飛車を狙つゝ九七へ角を見通す手がありますから先手は一九歩と明けぬのであります此邊は全局に眼を通して考ふべきであります△三七桂と上る△六四銀と出る△七八金▲七五歩△同歩▲同銀△七六歩▲八四銀△四五歩▲同歩△同桂▲四四銀△四六銀▲七三角は捨て置けませんから△五五歩と留る▲同銀と取る△同銀▲同角△二九飛▲三七角なる△四四歩打

ば同金と取れません取れば七一角と打たれます之れにて後手方は角を化ては居りますが先手には三三の歩の打ち込みもあり手に銀、角を持て居りますから指しよき形であります、此定跡は相槍の定跡中では中々劇しき指し方でありまして初心者には紛れが多いので現今は別に大橋宗英先生の定跡で双方が溫順に指す紛れの少ないものを敎ゆることが流行して居りますから之を左に出します

△七六歩▲八四歩は前章に申しました通り後手方始めより角を替らせぬ含みの指し方でありまして紛れの少ない相槍であります△六六歩も槍にする含みであります先手で角道を留るは弱いやうでありますが敵が角道を明けずに直に我角頭へ迫つて參りますから據ろなく我方も角筋を留めて置て敵が後に角道を明けて七七角と替つて來らせぬためであります▲三四歩は先手が角道を留めたからモー角を替つて來ませんから後手も槍に圍ふべく三四歩と突ひて後に四四歩と突ひて順次に三三銀、四三金と上る準備であります△七八銀▲八五歩△七七銀は云ふまでもなく八六歩と突かせぬためであります▲三二銀△五八金右▲五二金右△二六歩▲六二銀△二五歩▲三三銀も先手方と同じ意味であります△四八銀▲四四歩△五六歩▲五四歩△六八玉▲四二玉△七八玉▲三二玉△六七金▲四三金△七九角▲三一角△八八玉▲二二玉△[illegible]▲三六歩▲七四歩△三七銀▲七三銀此で先手方六八へ角を上る序でに一手德するため△三五歩と突き▲同歩△同角▲三四歩と打ちます前章には此時に先手方二四歩と突ひて劇しく指しましたが之れは溫順に△六八角と引ひて指します▲七五歩△同歩▲同角△七六歩▲四二角は先手方と同じであります△四六歩▲六四歩△三六銀▲七四銀△四五歩▲同歩を直ちに同銀と取つては四四歩、三六銀で効能がありませんから此で先手△三七桂と上るのでありますが後手も同じやうに▲六五歩△同歩▲七三桂と上ります△四五桂▲四四銀△二四歩▲同歩と取ります此で同角、同角、同飛では二三歩、と打れ一八飛で先手の効を失ひますから三四の歩を同角と取らずに△二三歩と呉れます、後手方同玉では危險でありますから▲同金と取ります△二五歩と繼ぎ歩をいたします之は▲同歩と取るより外は致しかたがありません先手方此でも同銀と二五の歩を取つては矢張り後手を食ひますから強く△二四歩と打ちます之を金で取れば同角と切られて次に後手、同角と取れば二五銀で玉の頭へ近寄られますから此二四歩は▲同角と取ります△同角▲同金は順序であります△四六角と打つ▲五一角と受ける（先手五一角ならば後手四六角で劇しき將棋となり先手に損があります卽ち先手五一角、四六角、四二飛、三七角なる、四一飛、四二歩で先手惡しく又飛車を棄て二四角なるでも二八角なると飛車を取つて居られまして先手金一枚では指せまんから先手五一角は面白いやうでも後手に四六角打ちがありますので結局先手の損となりますので始めから先手四六角と打つのが順當であります）本文に戻りまして△二四角と切る▲同角は據ろありません△二五銀▲四六角此で先手方飛車を逃げて居たのでは結局飛車を封じられますから（四二

飛ならば三七角なる、四九飛、四八歩と打たれ二九飛でも二八歩で飛を封じられます）△飛車を棄て置ひて△三四銀と進みます▲二八角なると指す此で先手方急ひで四三銀と金を取らずに先づ△二三金と打つ▲三一玉△四三銀となる後手方駒を打つても只取られる順序となりますから▲四一玉と逃げる△四四成銀と急がずに指す▲五一玉△五三桂なる▲六一玉△六三銀打▲同銀△同成桂▲六二歩の時に五二金では飛車を取る手順となつても懸り駒を失つて指切りますから△八三銀と打ちます▲同飛は已むを得ません△七二金▲五一玉△六二金よる▲四一玉△四二歩▲三一玉△三二歩▲四二玉△五二金で先手の勝であります最も此通りの手順で指せば相櫓は先手は先手だけの利で一手々々に早くなるから先手の勝となりますが之れとて相ひ懸りと同樣に後手方が中途で工夫して手順を換へますから必ずしも此通りの手順に先手が勝つことは實戰となつては豫期しかたいのでありますが先手としては先づ此手順に指すのが手順でありますから後手が若し定跡を知らずに先手の定跡にはまりますと此通りに順々に指されますのであります故に後手が定跡を知らぬと後手がはめられ又先手が定跡に暗ひと中途で手順を誤りたり又は紛らされて却て攻勢を取られて反對に此手を指されます要するに定跡に明るい方が勝つのであります又此將棋は先手が飛角を棄て居りますが俗に云ふ通り將棋は飛角ばかりでは指しませんから飛角を切つても指す場合ひには指さなくてはなりません此邊は能く先きを讀んで切るべきで急で指してはいけません

因に申しますが櫓圍ひの將棋は先づ角道を自から止め又角を引くなどで大駒の居どころを自然より他へ移すのでありますから居角のまゝで指すよりも自から遲れます且つ又玉を金二枚と銀一枚で圍つて居りますので何しても駒組みに手間が取れます因て敵がたの來る處を能く見極めながら順序をよく組ませんと手遲れになつて忽ち指し込まれる事となりますから敵にかまわずに組んで居ては損の定跡となります素人が定跡に組で居ては却つて負けるなどゝ申しますのは其處であります故に正式の駒組みを能く暗記して敵の出かたに因て變化を應用することが肝腎であります

櫓扇し

前章の相櫓は互ひに同じやうに櫓に組みますので先手は先手だけの利益がある次第でありますから後手は中途で工夫をかへて先手を後手にすることを計るは勿論でありますが同じ力ならば先手は先手だけの德を以て後手に中途より計られることはありませんが其處に多少でも力の相違があると先手必ずしも勝つとは極りません、而して力とは何ぞやと申しますと天然に將棋の才能を備へた人は格別として普通研究によつて力をつける人にありては先づ定跡に精通して變化に富んだ方が强いのであります何とならば定跡は古來の名人上手が工夫して其利益の駒組みを敎へてあるのでありますから自然に無理がなく駒と駒との連絡がついて居ります且つ攻守の道も宜しきやうに出來て居ります故に定跡を知つて指せば此先きは何なると云ふことが胸に明かとなつて居りまして敵の出次第で變化して參りますが定跡を知らずに指して居ると敵の指して來る手が何のためか分らず何時の間にか敵の術中に陷つて仕舞ふのであります又同じ定跡を知つて居ても變化を研究して居ないと途中から紛らされて知らず／＼に不利益の方に引き込まれます故に相櫓の如く先手は先手の利があるべき道理でも其力即ち定跡と變化に精通して居ませんと先手必ずしも勝つと云ふ譯にまゐりません此處が强弱の區別が出來る所以であります之に依つて將棋を眞實に研究するには先づ定跡から敎ゆる次第であります

既に同じ力でありとすれば相櫓に組んで居ては後手は先づ勝算がないと云ふ次第でありますから他に工夫をしなくてはなりません是に於てか一方の櫓に對して一方が之を崩して行く定跡の櫓くづしと云ふのがある所以であります、前にも申す通り力の相違さへあれば敵が先手でも中途で紛らして仕舞ひますが同じ力では先手を紛らすことが出來ませんから後手番の時は別に工合をしなくてはなりませんのが矢張り定跡の一つでありまして之れとても先方が其定跡に精通して居る時は

又も之に應ずるの變化を指されますから矢張り先手は先手だけの功能はあることゝなりますが人には得意と云ふものがあります卽ち特別に或る一つの定跡に精しく又其經驗に富んで居るのでありますから之に依つて敵を紛らすのであります之れとても畢竟は定跡に精しいと云ふ事に歸着しまして敵も之に精通して居る時は功用がないのでありますから何れにしても定跡と變化に研究を重ねて居る方に力があつて勝を占める理合となり之が卽ち強いと云ふことになるのであります、因て相櫓では後手は損だからと云つて櫓崩しを指し先手が其定跡を知らなければ甘くはめて仕舞ひますが先手も之を知つて居る時、卽ち同じ力の時は矢張り相櫓も同樣に先手の利に歸する次第でありますから定跡は單仕懸ける方の利益ばかりでなく仕懸けられる方でも知つて居なくてはなりません櫓くづしの定跡も其通りでありまして崩す方計りの利益でなく崩さるゝ方も之を知つて居て應戰すれば其手にはめられる前に他へ紛らすことが出來るのであります、又櫓崩しの定跡も幾通りもありますが此書は極初心の人のためでありますから餘り線密のは却て了解に苦みますから普通棋士の始めに敎ゆる處の一二通りを講述いたします扨て本文に入りまして

㋐七六歩 ㋑三四歩は每度云ふ通りで平手將棋は大抵此二手は始めに指します此處で先手方が六六歩と角道を留めれば櫓に組む下心（或は四間飛車、三筋飛車にもなりますが）と見て後手から之を櫓崩しの定跡で八四歩と飛車道を突ひて參りまして先手が後手の形となりますから後手櫓崩しとなります然し定跡は普通先手から仕懸けることに出來て居りますから矢張り先手の櫓崩しを說明した方が法にかなつて居ると思ひますから此處には先手は六六歩を突かずに ㋐二六歩と突きます、道理は同じでありまして要するに先手で櫓に組まんとすれば三手目に六六歩と突き後手が八四歩と突ひて後手より櫓崩しとなり又先手が三手目に二六歩とつき後手が四四歩と角道を留めて指せば先手が崩し方となるのでありますから何れにしても櫓に組んだ方へ向つて崩して行くのが櫓くづしの定跡であります先手後手とも之を應用してよろしいのであります但し前に申す通り此處では先手より崩す定跡を述べまして四手目に後手は ㋑四四歩と指します此手だけでは未だ後手が櫓に組むとも定りませんで或は四間飛車を指す考へかも知れませんから先手は樣子を見るため ㋐四八銀と上つて居ます此銀は何れにしても上るべき銀でありますから損の無い手であります又此銀を上らずに先手方二五歩と突て居る手もありますが然すれば後手に三三角と上られて次に四二飛の四間飛車か二二飛の向ひ飛車を指されまして櫓崩しになりませんから此定跡は敵に櫓に組ませて後に崩す含みで二五歩を突かずに態と緩めて四八銀と上つて敵の樣子を伺つて居るのであります二五歩と突かぬ次第は前章 相 櫓の時にも申しました通り後に二五桂と飛ばんとするために櫓崩しでは態と此二五歩を進めぬのであります次に後手方 ㋑三二銀と上ります之れだけでは未だ後手が櫓に組むか四間飛車に來るか分りませんから尙ほ樣子を伺ひ旁々先手方は ㋐五八金右と上つて居て玉の固めに取りかゝります此手も損のなき手でありまして敵が飛車道を突かずに居りますから先手は急いで其道を防禦する必要がありません總體玉は成るべく敵の飛先に居らぬやうに圍ふのが利益でありますから敵が若し居飛車のまゝ八四歩と突ひて來た時は七八金と上つて飛先きを防いで居りますが敵は尙ほ左の方へ力を集めて居りますから先手はまだ七八金を上る必要が少ないので先づ五八金と上つて居て追々に玉を左方へ移さんとする含みであります次に後手方も ㋑五二金右と上つて始めて櫓に組まんとする含みを示しました ㋐六八玉は先づ我玉を安然の處へ移してからの戰ひと云ふものであります ㋑四二玉は追々に二二へ持つて行く準備であります ㋐七八玉で玉座を定めます ㋐三三銀と上つて居る ㋐三六歩は敵がいよ／＼櫓に組む方針と見極めましたから其處に向つて攻擊準備を致したのであります ㋑三二玉 ㋐四六歩 ㋑四三金 ㋐四七銀は各攻守の準備であります卽ち先手方は敵の玉を圍んだ方へ向つて進み後手方は先づ玉を櫓

に圍んで後に徐ろに先手方の玉頭に攻めかゝらんとの準備であります(桂)五四歩と突く次に先手五六歩と受けては敵に三一角と引かれて却て我玉頭へ攻撃を早められますから敵の未だ手の廻らぬ中に仕懸けんとの含みで(角)五六銀と上つて居ます(桂)三一角は後に四二角と上つて二筋を防ぎつゝ敵の八筋へ利かせんとの含みであります(角)三七桂(桂)二二玉(角)六八金上る(桂)三二金で後手方完全に櫓に組み上りました(角)九六歩は後に玉の開き道を廣くしたのであります(桂)六二銀は遊んで居ては無益でありますから陣地に就いたのであります(角)四八飛はいよ／＼攻撃に出でんとする備へであります(桂)八四歩は最早や櫓に圍んだので徐々敵の玉頭を目がけて出陣するのであります(角)四五歩と此處に戰端を開きます此歩は取らずに居られませんから(桂)同歩と取ります此時直に後手方同銀と四五の歩を取つては四四歩と打たれ五六銀と引いては手損となり又四四歩を同銀と取つて大替りをした處で飛角の中を一枚敵に渡しまだ勝算がありませんから四五の歩は同銀と取らずに此處で兼ての含みの如く二五桂と飛びます(桂)四四銀と出ます此銀を逃げずに他の手を指して三三桂と銀を取らせる手もありますが桂銀の替りはまだ早いから四四へ逃げたのであります先手方此處で(角)四五銀と歩を取つて出ます後手方此銀は取れません取れば明き玉手となります但し捨て置ては四四銀と取られますから(桂)五五銀と出ます(角)四四歩(桂)四二金引(角)五六歩(桂)六四銀(角)三四歩なる(桂)五五歩(角)四二と(桂)同角(角)五四銀と出て居て最早や先手方の勝算歴々であります

因みに先手が二五桂と飛んだ時に四四銀と逃げずに後手方捨て置て六四角と出て一九の香を取つて角を化り其香を飛車に當て打ち飛車道を留めるか又は三七角となつて飛車を追はんと致しましても後手方驚いて此角を防いで居ては遲くなりますから直に三三桂なる、同桂、四五銀（又は四四歩、四二金引、四三銀打でも後手のつぶれとなります）と指して居て後手に角を化る暇がありません若し角を化れば四四歩、三四銀で矢張り先手の勝であります以上は簡單のものでありますが尙ほ次に櫓崩しの稍詳しいのを出します

筋違角はめ手

筋違ひ角は普通は損の手として黑人は指しません又敵が同じやうに筋違ひ角を打つて來れば先手が却つて後手になりますので互格の力では始めに筋違角を打た方が損となる道理であります此手は將棋新報に掲げた大橋家の秘傳に出してありますがそれは姑く措きて筋違角は打つて仕舞へば打つた方は一歩儲けただけで角は化れず敵には角を手に持て居られるだけでも打つた方が損と云ふことになつて居りますので卽ち黑人の指ない譯でありますが獨り花崎五段が初めての敵に對しては此手を指します之は所謂「はめ手」でありまして之を心づかぬ時は一度は負かされるのでありまして現に土居、金兩氏の如きも始めての時に此手に「はめ」られたのでありました故に此手は花崎氏の秘密ものでありますが強いて乞ふて此に出すことゝいたしました但し之は敵が知つて後は用心しますから二度も三度も同一の敵に用ひては成効しませんから「はめ手」として參考に供へて置くだけであります扨

(角)七六歩(桂)三四歩

と突ひたのは双方の定跡でありまして普通ならば先手が二六歩と突くべきでありますが此時先手方(角)七八金と上ります(桂)八四歩と突く(角)二二角なる(桂)同銀と取つた處で(角)四五角と打ちます之れが卽ち筋違ひ角と云ふのであります之れは後手が八四歩と飛先きの歩を突ひた時でなくては此はめ手は出來ませんのでありますから敵が知つて居て八四歩と突かずに他の手を指して居た時には二二角と角を替つても敵に銀を二二に上らせるだけ一手損で先手が後手になりますから注意しなくてはなりません此時後手も六五角と打てば互ひの筋違角となつて力爭ひとなりますが此局面は先手だけの筋違の角でありますから後手方は角を手にして居て打ちませんで(桂)五二金と上ります(角)三四角と歩を取る(桂)八五歩(角)五六角（此五六角と引かずに二六歩と突き次第に飛先きの歩を進めて二四歩、同歩と取らせ又一六歩、一四歩、一五歩、同歩と取らせ一八歩と打つはめ

手もありますが手順が遲て面白くありません）▲八六歩と突ひたのが「はめ手」にかゝつたのであります此時先手は八七歩となられては不利なりと考へ八六歩を同歩と取つては効がありません卽ち態と△七七金と出るのであります之れならば萬一後手が歩を化て金を取つて來る手順となつても金だけでありますが金が七八に居たのでは直にと金が銀に當り又玉に近くなるので七七金と上つて置くのがよろしいのであります後手は思ふ處なりと▲八七歩なると指します（此歩を化らぬ時は先手から八六歩と取り次に八八飛と廻る手がありますす）之れでスッカリ後手方は先手方に「はめ」られたのであります卽ち先手は△八三歩と打つ▲七二飛△八七金と。金を取つて仕舞ひ▲七四歩△七七金と戻るは八八へ飛を廻るためで此七七金がよろしいのであります。▲六二銀△八八飛▲七三銀△七五歩と指します此歩を同歩と取れば先手は七四歩と打ち之を同銀ならば八二歩となりますから後手は七四歩を同銀と取る手はありませんが因て前の七五歩も取らずに後手は▲八四歩と打つて敵の飛筋を留めます△七四歩▲同銀△八四飛（又は八二歩なると指てもよろし同飛と取れば七四角と銀を取る手あり）▲七五銀△八二歩なると指す若し七五銀の時に先手の飛車が逃げては後手は歩を利用して先手の飛先きを留めて仕舞から先手は後手にされるので飛を逃げる手なく（或は七六歩と金の頭へ歩を打たれても不利なり）八二歩と化るのであります▲七三飛△七四歩打にて此で飛を替つて後手の銀を馬鹿にして先手はと。金が出來て居るので結局の勝利であります但し先手が八四飛と出た時に後手が七六歩と打つ手があつて之を同金と取れば九五角打にて飛車取り玉手を懸けられますから此七六歩打は其まゝにして七七の金を取らせる覺悟で八二歩なると指してよろしいのであります

石田掛り

石田とは昔石田の某が指し始めたともの と傳へられて居りますが其人は明らかでありません始めて此駒組の出た時は之を破ぶるのに困難したので一時恐れられ石田掛りと云つて名高くなりましたが其後に之に對する研究が積みまして何分此駒組は飛車角を始めから動かして居ので先手が後手となり手遲れの氣味がありますので先手が指しては損の駒組と云ふことになりまして現今にては黑人筋では餘り指しませれが何かすると素人連には此駒組に惱まされて居る連中があるやうでありますから此に諸大家の研究になつた定跡數通を出します最も之まで將棋新報にても川井民其他の講義も出て又精選や歩式に出て居りますから之を能く研究した人には重復となりますが此篇は毎度申します通り極の初心の人が順序的に一應その駒組を覺ゆるために次第を追ふて平易に掲げて行くのでありますから其考へで重復を尤めず初心だけの人に見ていただくのであります

扨先手方△七六歩に對し後手方の▲三四歩は何に拘らず平手將棋の最初に指すべき手であります此時先手居飛で指すならば二六歩が順當でありますが此定跡は先手方が石田に組まんとする含みでありますから△七五歩と突きます此處で後手方が八八角なると角を替つて指す手もありますが夫では忽ち力將棋となりますから其事は後に出しますことゝして此處では先手に石田に組ませる含みで後手方は▲六二銀と上つて敵の攻擊し來る方面に備へます△七八飛は後に七六へ浮ひて石田に組む順備であります▲六四歩は銀を上つて敵の飛先きを受けるためであります△七六飛は含みの通り▲六三銀も前の意味を以て上つたのであります△六六歩は我角を動かすために敵角の道を留めたのであります▲五四歩△七八銀▲四二玉△四八玉▲三二玉△三八玉は互ひに玉を敵の飛先きより遠き方へ圍つたので玉は成るべくは敵の飛角の鉾先の遠き方へ圍ふのが德でありますから其意味で互ひに飛先きを避けたのであります

す▲四二銀は敵の角道が留つて居りまして角を替られる恐れがありませんから繰り上つたのであります若し此場合に先手の六六歩が突ひてなくて角道が通つて居ては四二銀と上つては二二角なる、同玉で後手の玉が孤立する形となりますから銀を四二へ上るは早いのでありますが今は其恐れがありませんから四二へ上りましたのであります△五八金左▲八四歩△九六歩は角を九七へ上つて石田に組む準備であります▲九四歩と受け△一六歩▲一四歩は互ひに端の仕懸けともなり玉の間道ともなる一舉兩得の必要の手であります次に△二八玉▲八五歩△三八銀は双方の備へであります次に後手方▲七二金は普通の將棋では右の金は大抵五二へ上るのでありますが之は敵が石田に組む含みゆゑ右方へ備へるために此へ上つたのであります△六七銀▲八三金△九七角▲五三銀△七七桂にて先手方は完然の石田に組み上つたので此通り飛車が七六へ浮き角が九七へ上り桂が七七へ行き銀が六七に居るのを正式の石田懸りと申すのであります後手方は尚ほ陣中の締りをつけるために▲四二金と上つて居ります△五六銀▲八四金と上ります△六五歩と仕懸けて見ます▲同歩△同銀▲六四歩△五六銀は手順であります後手方は敵銀を四五へ出せぬために▲四四歩と指します△四六歩は歩替つて飽まで銀を四五へ出んためであります後手方此は棄て置ても當分差支がありませんから▲七二飛と寄て金銀、飛を脅力させて敵の飛先きより殺到せんと計ります、先手方は含みの通り△四五歩と突く後手方之を直ぐに同歩と取つては同銀と出られて先手の望み通りとなり次には三筋へ銀が出て飛車を二筋へ廻られ玉頭より攻撃を受けますから此四五歩は取らずに▲五五歩とくれます△同銀と取る其處で後手方は▲四五歩と取る即ち敵銀を外らして四五歩にて位を取り且つ角にて敵銀に當りますから此五五歩のくれが一舉兩得となります總て將棋は直に敵の駒を取る時は面白からず先づ敵の駒を外して後に取ると云ふ場合が澤山ありますから心得て置かなくてはなりません次に先手方直く銀を六六へ逃けて居ては後手に追々と位を取られますから△五六歩と突ひて銀を繋きます▲五四歩△六六銀と引く此六六銀を初めに引けば敵銀が五四へ上つて來ますから我方の五六の歩を突ひて先づ位を保ち且つ敵に五四歩と打たして後に六六銀と引て居れば五筋が固くて此よりは攻て參られません然して後手は敵を擊退した形となりましたから先きに飛車を七二へ寄た含みに基づき▲七四歩と突ひて戰端を開きます△同歩は已むを得ません▲同銀も含みの通り△七五歩▲六三銀と引くは已むを得ません先手は差當り仕懸ける手がなく且つ四筋へ敵の歩が出て居て不安でありますから△四七金と備へて居ります▲九五歩△同歩と取る此時直ぐに同金と取る手につきては少し前の駒組みが違ますから之は後の分に說きまして此では▲九六歩と打ちます之を後手が同飛と取れば九五香と走つて飛角の一つを取られますから先手は此歩を取る手なく△七九角と引きます▲六六角と切る△同飛▲七五角と上つて後手方が優勢であります總じて石田は此通りに金に上つて來られる定跡が出來てから面白からぬ駒組となりましたが之を「金づけ」と俗に申しまして石田崩しの簡明なる普通の定跡として用ひられて居ります、勿論此通り指せば石田は勝てぬ定跡となりますが矢張り力次第で先手は中途に方法をかへて指しますから必ずしも此通りにばかりは參りますまいが之を腹に入れて居て變化に應する時は同斷の力では石田方は損と云ふことに黑人にては申して居りまして餘り指しませんのであります

石田掛り　一

更に一つ定跡を說きます之も石田に組んだ方が損と云ふ定跡でありますから何分石田組は面白からぬことゝなります先づ△七六歩▲三四歩△七五歩は前の定通りであります此で前のには後手方六二銀と備へましたが今度は直ちに▲八四歩と指して見ます△七八飛▲八五歩の次に先手方△五八金左と上つて居るは態と敵に隙きを見せたのでありまして此時後手か八六歩と突げば同歩、同飛、二二角なる、同銀、七七角打で飛が八二へ引けば先手方八四歩と打つて次に八三へ歩を成るこ

と丶なります之を同飛と取れば二二角と銀を取つて化られますから後手は八四歩を棄て置ひて三三銀と上つて銀の素抜きを防ひで居ります然すれば先手は八八飛と寄つて次に八三歩とならんとします此卽ち先手が八六歩と突かせるために態と五八金と上つて隙きを見せたるハメ手の一つであります、然りとて後手方が七七角と打たれた時に八九飛なると桂を取つて飛車を化た處が先手に二二角なると銀を取つて化られ大に損となりますから八六歩突きは敵にハメられること丶なるのであります又先手が五八金と上つて居るのは單に隙きを見せた計りでなく角を替つて後に後手に角を四五へ打たれ二七、六七の何れへか化られぬ豫防であります此邊は頗る先手に遠謀のある策戰でありますから用心なくてはなりません又後手が先手の望み通りハメられて後に八二飛と引ひた時に先手方が直ちに八三歩と飛車に當て打つたのでは飛車に逃げられて後に八三に居る歩が無益となりまして化ことが出來ません因て一つ控へて八四へ打つのが法であります然すれば次には八三へ化ることが出來、飛車を八八へ廻つてから此と金を棄て飛車を化込む手段が出來ます總て敵が隙をき見せた虚には詭謀卽ちハメ手のあるものでありますから用意すべきことであります之れは此石田に限らず何の將棋にもありますから序でなから述べて置いたのであります扨本文に戻りまして後手方は敵の計に乘らぬやうに徐ろに駒組を致すため ▲四二玉と指す △四八玉 ▲三二玉 △七六飛は敵が玉を三二へ圍つて最早角を替つてもハメ手が利かぬ事となりましたから此度は八六歩と突かれては不利に陷りますから七六飛と浮ひて豫防しつ丶石田に組む準備を致します ▲六二銀 △六六歩 ▲六四歩 △七七桂 ▲六三銀 △九六歩 ▲四二銀 △九七角は前に出した手順と同一となりまして石田の形となりました次に ▲五四歩 △七八銀 ▲五三銀 △六七銀 ▲七二金 △五六銀 ▲四二金 △三八玉 ▲八三金 △一六歩 ▲一四歩 △二八玉 ▲八四金 △三八銀 ▲九四歩と之れまでは前章に出した處と同じ手順であります此處で前章には先手方六五歩と突いて仕懸けましたが今度は溫順に △四六歩と指して見ます ▲五五歩 △六七銀 ▲九五歩 △同歩と取る今度は直此處で ▲同金と歩を取つて見ます △六五歩 ▲九六歩 △七九角 ▲六五歩 △同桂 ▲六四銀左 △六六銀 ▲八六歩で矢張後手方が優勢であります

横歩取り

横歩取りと申すのは相懸りから變化し來たるのでありまして卽ち先手方が二四歩を換り同飛と取つた時に後手が二三歩と打ちし場合に普通の相懸りでは二六飛と引きますが横歩取りでは二六飛と引かずに三四飛と横の歩を飛車で取るのであります此指し方は頗る復雜して居りまして後手の受け方によりて種々の變化を來たしますので初心の中は餘り指しませんのみならず「横歩三年の患ひ」など丶申す諺がありまして動もすると横歩を取つた爲めに飛車が立ち往生をするやうな場合が出來ますので輕卒の考へでは横歩は取れません、其代りに巧みに指しますと初めに歩を一つ稼いて居りますので大に利益となり敵方は初盤に歩を一つ損をして始終指し惡き形となりますので双方油斷の出來ぬ定跡であります故に横歩取りの定跡を奥まで極めるには簡短の説明では行き屆きませんが然りとて此説明にのみ紙數を費す譯にも參りませんから例に依つて一、二通りを出します、之れは此編は廣く淺く初心者のために將棋の各種指し方を一通り説明する目的でありますから己むを得ません次第であります其詳細なる處は多くの定跡書を繙きます中に必ず幾種か異なつたものがありますから順次に奥へ研究して行くことを肝要といたします、扱いよ〳〵本文へ移ります

△七六歩 ▲三四歩と互ひに角道を明けますのは平手のみならず大抵の將棋では第一に角道を明けることは屢ば説ひた通りであります次に △二六歩と飛車道を明けたのは先手の位として先づ居飛車で指す含みであります後手方が此時四四歩と角道を止めれば四間飛車其他いろ〳〵の定跡となりますが此處では後手方も相懸りで指す含みで ▲八四歩と飛車先きの歩を進めます先手は益す〳〵飛車先の歩を進めて △二五歩と突く後手も同じ意味にて ▲八五歩と突く此時先手方が急激に指す時は二四歩と突く事もありますが夫れでは力將棋となつて定跡になりませんで所謂腕次第となりますので此處は先手方定法を守りて △七八金と上つて居ります、

念のため何ゆゑ七八金を上らぬ時は力將棋となるかと云ふ手順を申しますれば試みに先手方七八金を上らずに直ちに二四歩と仕懸けて見ませうならば卽ち二四歩同歩、同飛、八六歩、同歩、同飛と云ふ同じ手になりまして此時先手方二二角なる、同銀、同飛なる、八九飛なるで先手方は銀、桂の替りて德のやうでありますが後手方も角、桂と云ふ飛び駒を手にして居りまして直ちに打ち込みがありますから先手方も油斷が出來ません其利害は何れにしても之れで全くの冒險將棋となりて互ひに全能を盡して得心の行く將棋が指せませんから斯る將棋は稽古になりませんゆゑ先づ先手は急がずに先手だけの位を以て徐々に戰ふ含みで七八金と上つて居るのが定法であります又先手が二四歩と突ひた時に後手が同歩と取れば桂銀の替りで先手に損なしと云ふことも出來ますが若し後手が二四の歩を同歩と取らずに直ちに八八角なると指して參りますと先手は二三歩なると指して居ては縱令と金は出來ても角損になりますから是非とも八八角なるを同銀と取つて居らなければなりません其時に後手が二四の歩を同歩と取りますから先手同飛と其二四の歩を取ります、後手三三角と打つ此時先手二一飛なる後手八八角なるでは今度は先手が桂を取りて後手に銀を取られますから先手は二一飛なると指さずに二八飛と引ひて銀を繫ぎますと後手は二六歩と打ち次に二二飛と廻らんといたします此二六歩を直ちに二七歩と飛車へ當てゝ打たずに先づ二六へ控へて打ち次に二二飛と廻らんとする指し方は前にも屢ば說きましたから御承知の事と信じます因て前に說きし如く後手が八六歩と突きくれば先手が銀を取つて先きに飛車を化まして後手は桂を取り後に飛車を化るのでありますから、まだ〳〵先手に德がありますが後に說きし如く後手から角を替られて三三へ打たれますと反對に後手に銀を取られて角を化られ先手は桂を取つて後飛車を化るのでありますから德とは申されません然りとて八八角なるを同銀と取つて三三角と打たせても同じ結果となり又銀を取らせまひと飛車を引けば二六歩と打たれ次に飛車を二二へ廻られまして

大損となりますから何れにしても七八金を上らずに直ちに二四歩と先手の指すのは冒險將棋でありまして稽古になりません因て此處では先手七八金と上つて指すことに致しましたのであります

次に後手方も同じ意にて▲三二金と上ります△二四歩▲同歩△同飛▲八六歩△同歩▲同飛と之れまでは普通の相懸りと異りませんが此時普通ならは先手方八七歩と打ち後手八四又は八二飛と引き次に先手は二六飛と引き後手二三歩と打つのが相懸りでありますが此定跡は横歩取りの定跡でありますから先手方は此處で△三四歩と横の歩を飛車で取ります之れが卽ち横歩取りであります後手方捨て置いては二二角と替られ同金でも同銀でも敵飛に金銀の中を取られて化れますので▲四一玉と寄つて金銀を繫ぎ兼ねて玉の圍ひに一手德をして置きます先手方飛車を其まゝにして置ては後手より角を替られ先手で二五へ打たれ飛角を替られるか又は敵角を四七へ化れますから先手方は歩を一つ稼いたのを德として元の處卽ち△二四飛と戻ります、最も此處で三二飛なると金を取つて飛車を切る指し方などもありますが夫は激烈過ぎますので稽古には致しかねますので先づ二四飛と元へ戻る指し方を說きます▲八八角△同銀は手順であります▲三三角と打ちます先手方此處で飛車を二八へ引ひて金銀を繫いで居ては後手に二七歩と打たれて（此時は後手に飛車を二二へ廻る手がありませんから二六歩と控へずに直ちに二七歩と飛車へ當てゝ打ちます）飛車を封じられますから三三角に對しては强く△二一飛なると指します▲八八角なるは含みの通りであります先手方之を同金と取つては同飛化と指れて玉に近く大に損となりますから先づ△八七歩と呉れます▲同馬で少しく敵の馬が遠ざかりましたので此暇に先手は△二四桂と打ちます此時後手方には强く七八馬と金を取る手と二二金（變化）と金を逃げる手がありますが先づ强く▲七八馬と金を取つて見ます△三二桂なると金を取る▲五二玉と逃げる△三一龍と銀を取る▲八九飛なる△四八玉の次に後手四二龍で詰むから▲六二玉と逃げて居る此形では互ひに駒の損

徳もありませんで化駒の形も玉の形も同様であります先手方は矢張り先手を取て居ります丈の利益があります平手將棋は互ひに激しく取りつ取られつして居る中にも結局甚だしき損徳の無きのが即ち定跡による功能でありまして且つ先手は何處までも先手の位を持つて居ると云ふのも定跡に依る功能であります扨斯の如く互ひに五分五分の形勢ではありますが先手方は此處で緩めては居られませんから飽まで先手の功を以て

☗五二銀と打ちます之は捨て置けませんから後手△同金と取ります☗八三角と打ちます之は同龍と取れば先手が六一金と打つて順送りに後手の詰みとなります又捨て置ても六一龍でも角なるでも詰みます即ち此角は一擧兩徳の妙手であります後手は五一金と止めても六一金と打たれて詰みとなりますから防く手がありませんので△五四歩と玉の逃け道を明けます☗六一角なる△五三玉は順序であります☗五二馬と金を取る此馬は同玉と取れませんで取れば四二龍、六一玉、五一金で詰みますから△六四玉と逃げます☗七五金△五五玉☗四六金△四四玉☗四三馬△同玉☗四二龍△三四玉☗三三龍△二五玉☗三六金△一四玉☗三四龍迄にて先手方の勝であります總て五二銀打より八三角打と續いて必死を懸け玉手々々で緩めずに詰める手順が大に參考となるべき處であります

☗二四桂打の局面（變化）

	九	八	七	六	五	四	三	二	一
一	香	桂	銀	金		王	銀	龍	香
二		飛					金		
三			歩	歩	歩	歩			歩
四								桂	
五									
六									
七	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩		
八		馬			玉	金	銀	桂	香
九	香	桂							

持駒　先手角、歩二　後手銀、歩三

次に先手方が二四桂と打つた時に後手方七八馬と金を取らずに二二金と逃げた變化を説明いたします（圖面より指して御覽なさい）即ち△二二金☗三二角△四二玉☗三一龍△同玉☗四三角なるにて矢張り後手方は一手一手に必死を懸けられ結局防ぎがありませんことゝなりまして先手の勝利であります

四間飛車

四間とは飛車を四筋へ廻して指すから名けたのであります、之れは後手方の指すべき駒組みでありまして先手は居飛車のまゝで指すのを利益とすることは前に屢々申し述べた通りであります故に此駒組みは正く云へば居飛車四間と申すのであります此指し方は現今後手方の好んで指す定跡でありまして何れの書にも出て居りますのみならず將棋新報にも澤山出で居りますが順序として此編にも一通りを出します最も四間は好んで指す人の多きだけに其變化も澤山ありますから此編にも其駒組を成るべく多く出します説明は大同小異でありますから末の方は一々説明せずとも前の説明に依つて了解することが容易のことゝ思ひます扨本文に入りまして

☗七六歩△三四歩は毎度申す通り互ひに角道を明けるのが將棋の最良の指し方であります次に先手は居飛車で指す含み故☗二六歩と突きます此時後手方は相懸りならば八四歩と突きますが此編は四間の駒組でありますから後手方△四四歩と突きます之れでは自分で角道を留めたやうでありますが之れは先手で自分の角道を留めたのとは異り後手であるから勢ひ初めは受けて指すことゝなりますので角道を留めても法に背かぬのであります且つ此四四歩は後に飛車を此筋へ廻し銀を操り出し飛、銀、歩にて四筋より突擊せんとする策戰でありまして即ち四間飛車の法であります次に先手の二五歩は居飛車の普通であります後手は二四歩と突かれて敵に歩を換はられては飛車の筋を通した上に一歩手に持たられ一擧兩得をされますから之を防ぐために△三三角と上ります先手方は敵がいよ〳〵四間飛車で四筋より進んで來る模樣が見えましたから☗四八銀と上つて四筋に備へます此四八銀は縱令敵の駒組が他に變じても上つて居て損の無い銀であります但し敵が居飛車で左の方から攻めて來る時は七八金の方を先きに上るのであります此處は左の方は安全でありますから先づ此銀を上つたのであります△三二銀は次第に四筋よ

り操り上る準備であります(先)六八玉は敵が右方より攻撃して參りますから戰線に遠き左方即ち七八へ玉を圍ふ手順であります(後)四二飛は即ち含みの通り四間へ飛車を廻したのであります(先)七八玉は前の意の通りでありますが之れも敵が左より攻め來る時は金を此七八へ上つて居るのでありますが左の方は當分安全でありますから玉を此處へ圍ふのであります素人が定跡ばかり指して居ては却つて敵に破らるゝと申すのは此處でありまして敵の鋒先きを構はす何でも定跡だからと云つて玉を七八へ持て行などのことがあるから破ぶらるゝのでありまして能く敵の駒組を見て此方も駒組を正しくする時は定跡を指して損と云ふことはありません次に(後)六二玉も敵の飛車先きを避けて右の方へ玉を圍ふためであります(先)五八金右と上るのも四筋に備へつゝ玉の備へにするのであります(後)七二玉も玉を安全の地へ圍ふためであります(先)九六歩は端の位取りで場合によりては敵玉を端しより攻める準備ともなり又我玉の横を廣くして置く一擧兩得の手でありまして櫓圍の外は是非此歩を突ひて置くべきであります(後)九六歩も同じ意味で位負けせぬやうに受けて置くのであります(先)一六歩(後)一四歩も玉には關係なきも位取りのため受けて置くのであります(先)五六歩(後)五二金左(先)三六歩は後に桂を上るため(後)八二玉は前に申せし含みの通り(先)三七桂も豫定の通り(後)七二銀で玉の圍ひが出來まして之を美濃圍と申します(先)二六飛と浮くのは敵より三五歩と突かれ桂頭を襲はれぬためであります且つ中段を横に防ぐ爲めともなります(後)四五歩と戰端を開きます普通ならば後手方は猶ほ四三銀と上て後に徐々戰端を開くのでありますが其事は後に說くことゝして此では我玉は既に美濃に圍つて安全でありますから早く戰端を開ひて見たのであります先手方は遲き手を指して居ては敵より四筋へ懸られますから飽まで先手を取る策戰で(先)三三角なると角を換つて行きます(後)同銀は手順であります(先)八八角と打つて敵の飛先きに備へます後手方は未だ角の打ち込みもありませんで急に戰ふ處も見えませんで(後)六四歩と突ひて後に金を上つて玉を守り且つ敵玉の方へ先兵を進むる準備を致します(此處變化あり後に出す)(先)二四歩(後)同歩は手順であります(先)三五歩(後)同歩と取らせるのは後に歩を手にして銀頭へ打ち八八に居る角を働らかさんとの爲めであります(先)四五桂(後)同飛と取らせて先手方一歩を持ち(先)三四歩と打ちます之は取るより外手段がありませんから(後)同銀と取ります(先)二四飛と出て先手方は飛、角を捌くことになりましたので桂は損をしても却て指しよき形であります

(先)八八角の局面

持駒　後手方角　先手方なし

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂		金		飛		桂	香
	王	銀	歩	金		銀	歩	
歩	歩	歩	歩	歩		歩		歩
					歩			
歩		歩	歩	歩		歩	飛	歩
	歩	玉	金		銀	桂		
	角	銀			歩			
香	桂	香						

一　二　三　四　五　六　七　八　九

其二

(先)七六歩(後)三四歩(先)二六歩(後)四四歩(先)二五歩(後)三三角(先)四八銀(後)三二銀までは前と同じであります此で前には玉を先きに操りましたが今度は(先)五八金右と先きに上つて居りますが結果は同じであります(後)四二飛(先)六八玉(後)六二玉(先)七八玉(後)七二玉(先)九六歩(後)九四歩(先)一

六歩(▲)一四歩(△)五六歩は前と同じであります此處で前には後手方五二金と上つて居ましたが今度は位取りに負けぬやうに(▲)五四歩と受けて居ります(△)三六歩(▲)八二玉(△)三七桂(▲)七二銀(△)二六飛も前に申した手順であります此で今度は(▲)四三銀と上つて指します先手方は矢張飛、角を捌く目的で(△)二四歩(▲)同歩(△)三五歩(▲)同歩(△)四五桂(▲)同歩(△)三三角なる(▲)同桂(△)二四飛(▲)二二

(△)五五歩の局面

持駒 後手角桂歩 先手角歩

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香	桂		金		金			香	一
	玉	銀			飛		歩		二
	歩	歩	歩		銀	桂			三
歩				歩	歩	歩		歩	四
									五
歩		歩			歩			歩	六
	歩		歩						七
	銀	玉		金	銀				八
香	桂		金					香	九

歩(△)三四歩で桂を取り返さんとします後手方左の方が危險でありますから(▲)四四角と打つて受ける(△)八八角と打つ(▲)同角なる(△)同銀(▲)四四角(△)六六角と打つて飽まで前の意を通す後手方是非なく(▲)五五歩と留める(△)同角(▲)同角(△)同歩で五筋は留まつたが三三へ歩を成れる恐れがあるから又も(▲)四四角と打つ此處變化あり後に出す(△)五三角(▲)同角と角を犧牲に供して(△)三三歩なると指す(▲)六二飛(△)四三と(▲)六四角と逃げる(△)五四桂と打つて角は損となつても結局先手方の利益の形となりました次に後手方最後の四四角打ちの處で變化ありと申しましたが即ち圖面の如き場合に四四角と打たずに後手方(▲)三二金と上つて防ひで見ますが矢張り(△)三三歩なる(▲)同金(△)三一角打(▲)三二飛(△)二二飛なる(▲)同飛(△)同角なる(▲)三二金(△)一一馬で先手の有利であります

四間飛車は雙方に手が多く中々面倒でありますから以上の外に更らに一局を出します前のと參考して敵の來る處を察して其宜しきに從がへば先手の利となります

其三

(△)七六歩(▲)三四歩(△)二六歩(▲)四四歩(△)二五歩(▲)三三角(△)四八銀(▲)三二銀(△)六八玉(▲)四二飛(△)七八玉(▲)六二玉(△)五八金右(▲)七二玉(△)九六歩(▲)九四歩(△)一六歩(▲)一四歩(△)五六歩(▲)五四歩(△)三六歩(▲)八二玉(△)三七桂(▲)七二銀(△)六八銀(▲)五二金左までは前に出しましたのと大同小異でありまして説明を要しませんが前には先手方此で二六飛と浮ひて指しましたが今度は方針を更へて指して見ます即ち(△)九七角と出て敵の中央を脅かして見ます後手方飛角を換はりせぬために(▲)四一飛と引ひて備へます先手方角を何時までも九七に居ては九五歩と突かれますゆゑ(△)八六角と上つて居ります(▲)四五歩と突ひて角筋を通します先手方七七へ銀では出て居る角が捌き惡くなりますから(△)七七角と引ひて換はらんとします(▲)同角なる(△)同銀(▲)三三角(△)六六角(▲)同角(△)同銀(▲)三三角と打ちます之は敵より二筋へ攻め來るを防ぎつゝ兼て敵の左を伺ふのであります先手方も二四と七七へ利かして(△)六八角と打ちます(▲)六四歩は六六の銀を追ひ七筋へ向はんとする含みであります(△)二四歩(▲)同歩(△)同角(▲)同飛(△)三三角(△)二九飛(▲)二三歩は何れも己むを得ぬ手順であります

先手方敵の陣地へ角打ちの場所を作る目的で(△)五五歩(▲)同歩と取らせ(△)三五歩(▲)同歩と取らせて而して後に(△)五四角と打ちます(此處變化あり後に出す)(▲)四二

(△)五四角打の局面

持駒 後手歩二 先手歩

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香	桂		金		飛		桂	香	一
	玉	銀		金		銀			二
	歩	歩	歩	角	歩	歩	歩	歩	三
歩				歩					四
									五
歩		歩	銀		歩	桂		歩	六
	歩		歩	金	銀				七
		玉	金				飛		八
香	桂							香	九

飛△三二角なる▲同飛△二三飛なる▲二二飛△同龍▲同角△二三飛打▲四四角△二一飛なる▲三六歩△四五桂▲六五歩△七七銀引▲五六歩△五三歩打▲六二金よる△五四桂▲六三金△五二歩なる▲同金△五三歩▲同金上る△六二桂なる▲同金△七一銀打にて先手方の勝であります

尚ほ圖面後手方四二飛の處で後手方▲四三金としても△同角▲同銀△二三飛なる▲二二歩△二六龍▲六五歩△七七銀▲五一飛△四五桂▲四四角△四二金打にて先手方の利益であります

其四　先手四間はめ手

前の三局にて後手四間定跡の大體は說き了りましたが花崎五段の稽古に用ゆる先手四間につきてのはめ手、はまり手がありますから一章を出します扨如めに於て

△七六歩▲三四歩△六六歩▲八四歩△六八飛▲八五歩△七七角▲六二銀△七八銀▲四二玉△四八玉▲三二玉△三八玉▲五二金右△一六歩▲一四歩△二八玉▲五四歩△三八銀▲七四歩△六七銀▲九四歩△九六歩▲四二銀△五六金左▲三三銀△六五歩▲三一角△五六銀▲八六歩△同歩▲同角△八八飛▲八五歩△六六角▲四二角△八四歩▲八六歩(春)

之れまでは後手四間の駒組と同じやうのものでありますから別に說明は用ひませんでも前に出しました三局を味へば了解いたすこと丶思ひますが此八六歩と突くのは後手方の不利益でありまして先手のためにはめられます卽ち左の通りとなります

△三三角なる▲同角△八六飛で後手方は銀、角の替りで德のやうでありますが角を化て居れば八三歩なると指されますので飛車が助りません因て先手方の三三角なるを同角と取らず同桂と取つて見ましても先手から八三銀打ちと指されて矢張り飛車を取られます故に先手の八四歩に對して八六歩と突ひては先手のために後手方がはめられることになります

故に先手の八四歩に對して八六歩を已めて七三桂と指して見ます(春)▲七三桂△七七桂と指します之れは後手の七三桂に對して先手方前と同じやうに考へて三三角なると切れば今度は後手の角が先手の飛車に當つた時に飛車を八六へも八五へも浮けませんから却て先手がはまる事となります因て三三角の切りは無く七七桂と上つて居るのであります此で後手方

▲八六歩とつきます之れで最早先手は桂が七七へ上つて居て角に當られる恐れがありませんから此で

▲八四歩の局面(春)

持駒　双方なし

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂				金		桂	香
	飛		銀	金	角	王	歩	
歩	歩	歩	歩	歩	歩	銀		歩
			歩			歩		
歩	歩	歩	角	銀	歩	歩	玉	歩
				歩		銀	桂	
	飛			金	金			
香	桂							

△三三角なると切る後手方之を同角と取る手と同桂と取る手の二つがありますが先づ同角と取つて見ませう卽ち

(秋)▲同角△八六飛▲七七角なる　(後手に歩が一つあれば此で先づ八五歩と打て置きますが歩が無ゆゑ直ちに七七角なると指すより外に手なし)△八三歩なるにて後手八九飛と下れば先手八四飛と出ますから後手の飛は逃げて居りませんで▲八六馬と飛を取る△八二と飛を取る

此の形では先手方は角桂を取られて銀を取つたゞけではありますが金が出來て居ますから桂か銀は一つ取れます、其上に先手の玉は堅固でありまして後手の陣形は整のひませんから却て先手が指しよいのであります因て前へ戻りまして先手の三三角なるを同角と取らずに後手方同桂と取つて見ます卽ち

(冬)▲同桂△八三銀打▲八一飛△七四銀なる、之れにて後手方は歩切れにて指し惡き形であります、然しながら別に又後手方に一つの指し手がありまして此七四

銀なるに對して面白き防ぎがありますから先手の七四銀なるにて後手方が指し惡き形と云ふのは表面だけでありまして之れも矢張り先手がはまる事となります其指し方は卽ち七四銀なるに對し後手方

▲四四角と打つのであります△六八金と防ぐ▲八五桂とぶにて先手が却て不利となります之れまでは互ひにはめんとし〳〵して無理の指し方でありますから一手の違ひで互ひに善くも惡しくもなりますから能く注意

▲八六歩の局面（秋冬）

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香					歩		桂	香	一
	飛		銀	歩		王			二
歩		桂	歩		歩	銀	歩		三
			歩	歩		歩			四
歩	歩	歩	角	銀	歩	歩	歩	歩	五
		桂		歩	歩	銀	玉		六
	飛			金			桂		七
香					金				八
									九

持駒　先手銀　後手角

一一枚落　五五歩留め破格

二枚落將棋は上手より五五歩と留めたる時に下手が之を同角と取る時は上手方の五筋の歩が切れ且つ次に上手の銀に六五の歩を取られて一歩を手にされ下手方の不利益、卽ち上手方の德と云ふのが普通の定跡で之を五五歩留めと云ひ下手方は五五の歩を取らぬ事に敎へてありますが花崎五段は此五五の歩を角で取つても差支へなく却つて下手の利益となると云ふ新定跡の研究を爲し特別の稽古人には之を敎へて居ります勿論二枚落した上手は下手に研究された手を指れては何れにしても勝ち形の定跡は無い譯でありますから花崎氏の力でなくても五五歩を取つたからとて下手が惡い譯はないのでありますが全然二枚落ちの力の相違した手合では研究もなく五五歩を取る時は上手に負かされると云ふ危險があつて此五五歩を取らぬ事に定跡が作くられてある次第であります然るに花崎氏の研究通り心に入れて指せば五五歩は取つても差支へなき事となります

してはまらぬやうに指すことを示したものであります

然らば本筋に指したらば如何と申しますれば始めに戻りまして秋冬の圖の如く後手が七三桂と飛んだ處で直ちに三三角と切らずに先づ六四歩と突きくれるのであります卽ち

（秋冬）△六四歩▲同歩△八六飛▲六五歩△三三角なる▲同桂△八三歩なる▲八六角△八二と▲七七角なる△七二と之れならば正當に先手方が指し好き形であります因て先手三三角の切り時が大事でありますから注意すべき處であります尙ほ先手が六四歩と突きくれた時に後手之を同歩と取らず同角と取りますと矢張先手は左の通り指してよろしいのであります卽ち（秋冬の圖の八六歩の次に）

△六四歩▲同角△三三角なる▲同桂△八三銀▲八一飛△七四銀なるにて今度は後手に四四角の打ちがないので先手方がよろしいのであります何故ならば四四角と打つても左の如くなりまして矢張後手方は指し惡いのであります卽ち

▲四四角△六六歩▲同角△六七金にて角に當つて先手となるだけ儲であります

一一枚落の定跡は花崎氏が獨り秘して前記の如く特別の稽古人にのみ敎へて居たもので之を發表することは花崎氏の不利益でありますが今回特に氏に請ふて發表することに致したのであります

扨て上手方始めに△四八銀と上るは何の二枚落ちの定跡も同樣でありまして此處より五筋に上ると共に敵の模樣を伺つて置くのであります下手方▲三四歩と角道を明けるのも普通△五六歩▲六四歩も二枚落ちの定跡であります△五七銀▲六五歩の次に上手方△五五歩と突くのが普通定跡の五五歩留めであまして之を同角と取る時は五六銀、二二角、六五銀と歩を取り初めに記した通り上手の五筋の歩が切れ手に一歩を持つので上手の利と云ふのが普通の定跡でありますから此五五の歩は取らずに下手は六二飛と廻つて六筋より飛角が協力し且つ下手の右銀を六筋に繰り出し一齊に攻擊すると云ふのが普通の定跡であります、然るに花崎氏の定跡は此五五歩を直ちに▲同角と取ります上手は豫定の通り△五六銀と出ます▲二二角と逃げる△六五銀と歩を

取る▲六二飛と廻つて銀を取れと指します此時に上手の銀は五六と七六と左右何れへか逃げるよる外はありませんが先づ此銀を右へ逃げる方から説明致します即ち(甲)△五六銀と引く▲五四歩と突ひて次に五五歩と突ひて銀を追ひ飛車を六七へ化る含みでありますから上手方も▲六八銀と上つて居て　豫め飛車の化を禦ぎます▲五五歩△四五銀は順序であります▲三五歩と突ひて銀を左右から押へて次に下手は六四飛、三三桂で

▲六二飛の局面(甲乙)

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂	銀	金	玉	金	銀	角	香
			飛					
歩	歩	歩		歩	歩		歩	歩
						歩		
			銀					
歩	歩	歩	歩		歩	歩	飛	歩
							桂	
香	桂	銀	金	玉	金		玉	香

一 二 三 四 五 六 七 八 九

持駒　上手歩　下手歩

銀を取らうと計りますから上手は此銀の進退に困り五四歩と打つて飛の横筋を留めて置くか又は三四銀と出て居て飛車の出た時に二五へ銀を引く（但し下手も三四銀の時には三二金又銀を上つて居て後に六四飛と浮く含みである）仕度をして置くかの二つであます、因て先づ△五四歩と打つて見ます▲五二飛と寄る△三六歩▲四四歩△三四銀▲三二銀△三五歩▲二四歩にて次に飛車が五四の歩を取つて出るため上手は五筋より押され又三四に居る銀も三三歩と打たれて終に取られて仕舞ひます因て上手方敵の三二銀に對し(イ)三五歩と取らずに先づ二五銀と引ひて居ります下手方は二四歩とくれる下手方之を同銀と取れば下手方は直に二八歩と打つて三七桂、二一歩なるでと金を作り香を取りますから大に利益であります、然らば上手は二四の歩を同銀と取らずに一六銀と引ひて居ります下手一四歩で銀を取らうと來る上手二六歩と突ひて銀の逃げ道を明ける下手二五歩と突き之を上手が同歩と取つても同銀と取つても上手は前の通り二八歩と打つて金を

作つて桂、香を取る含みで指します何れにしても二枚落ちの將棋は下手方はと金を作つて行くのが定跡であります、右の如くにして始めに銀が六五の歩を取つて出た時に下手が六二飛と廻り五六銀と逃げた手は次第に銀を壓迫されて終に下手にと金を作られ桂、香などを殺される事となりますから今度は銀を左へ逃げる指し方を説明致します即ち圖の如く下手の飛車が六二へ廻つた時に(乙)▲七六銀と逃げます△七四歩は次に七五歩と突き銀を追つて飛を化ふとすること甲の處で説明した五四歩と同じ意味でありますから上手も同じ意で△六八銀と上つて居ります

▲七三桂△七八金▲七二銀△五七銀▲六五歩と打ちます、此下手の六五歩打ちが大事の手でありまして若し之を打たずに居りますと上手に六六歩と突ひて居られますと七六に居る銀を六七へ引かれ上手の陣が堅固となつて下手の力では破り難くなりますので上手に六六歩を突かせぬために此六五歩を打つので此邊が將棋の含みある大事の處であります此處に至つて上手は手がかりなきため△三八金とでも上つて陣中を固めるより外ありません次に▲六三銀△五八玉▲六四銀△八六歩と銀の逃げ道を明ける下手は何時でも七五歩と突けば銀を追ふことが出來て敵の駒を逆にすることを得るから之は機を見て追ふことゝして之れより下手は順次に駒組みを整へ徐々に壓迫して行けば普通他傳（他傳の定跡は將棋新報に詳しく出してあります）の定跡で結局の勝となります尚ほ他傳の定跡は別に説明することゝいたしまして以下他傳に移るまでの駒組順序を説明いたしますれば前記上手の八六歩の次に下手方五二金左△三六歩▲五四歩△五六歩打▲六三金△四六歩▲五二飛△四七玉▲三二銀△三七金▲六二玉△二六金▲七二玉△三七桂▲六二金すぐにて下手方他傳の駒組みとなりました以下は他傳の定跡に讓りまして之れにて上手方の五五歩留めは効を失ふことゝなりましたのであります

二枚落ちには此外三歩つき切りと云ふがありますゆゑ追々順を逐ひ御覽を願ひます

二　枚　多傳又他傳

前章に出しました二枚落五五歩留の破格は花崎氏考案のものでありまして之れは花崎氏が特別の稽古に用ゆるものでありまして普通は五五の歩は取らぬことに敢へてあります之は後に五五歩留めの定跡の處で説明いたしますが此處では兎も角前章の中に引き合ひに出ました多傳の定跡につき一通り説明いたします最も之れは將棋新報の第二年に義氏が講義したことがあります

が將棋の秘訣にはなくてならぬ定跡でありますから一層初心家に分るやうに平易に解説いたします扨最初に上手方が

▲五六歩と突きますのは之は此五筋より右の金をくり出すためでありますが五五歩留めの定跡では此五六歩を次ぎにいたし最初に四八銀と上り次に五六歩と突くのであります次に下手方▲三四歩と突くのは何は兎もあれ角道を明けたので何れの定跡でも此手は下手方の初めに指すべき手であります次に上手方▲五八金右と上る之は普通の二枚落ちで銀を五筋よりくり出すと同じ意味で金を五筋より上るためであります▲六四歩は之も普通上手の銀の上る時と同じく此六筋の歩は突き出して置かぬ時は後に飛、角協同して六筋より攻撃するに不便であるからであります若し之を怠つて上手に五七へ金を上がられて後に六六歩と留められては角道が通りませんから上手の金の上がらぬ中に此六筋の歩を突き出して金が五七へ上つても六五歩と突き切つて置けば上手は六六歩が突けませんから角筋が通つて下手は指しよいのであります上手方豫定の通り五七金と上ります▲六五歩の次に上手が五五歩と突けば金、銀の相違はありましても矢張り五五歩留の定跡となります因て此多傳定跡では五五歩を留めずに▲四六金と上つて指します此で下手方六六歩と突ても同歩、同角、四八銀で銀を上げたゞけ一手損になりますから下手は敵の七筋を狙つて▲七四歩と突きます此でまた上手五五歩と留める手もありますがそれでは矢張り五五歩留めになりますから七筋を受けて指す爲めに▲七八金と上つて居ます▲七五歩と益す進みます此時上手は左の銀を八八と六八へ上る二手がありますが若し八八へ銀を上る時は此銀は一生遊んで仕舞つて右の方が薄弱となつて忽ち下手方に右から破られますから▲四八銀と上るのが本筋であります此處で下手方が七六歩と突いたならば角が通つて居て面白いやうに見えますが其時上手に五五歩と留められては下手七七歩なるにても同銀と取られて更に効能がありません因て▲五四歩と指して五五歩と留めさせぬ方針を取ります次に上手方▲四五金と進んで一面は五筋の歩を狙ひ一面は角頭に肉薄せんといたします下手▲五二飛と廻つて五筋を防ぎます上手方三四金と進んでも下手に三二金と上られては上手の金は却て中段に遊びますから此處七筋防禦のため▲八六と突ひて金を八七へ上り七六の歩を突かせぬ用心をいたします、之に對し下手が七六歩と突けば八六金、七七歩なる、同桂で上手の桂を捌かせますから下手七六歩突きはなく此處急がずに▲四二銀と上つて陣地を固めます▲四八銀も陣地を固めつゝ追々くり出して戰線へ臨むためであります、▲五三銀▲七六銀▲六四銀▲五八玉▲六二銀▲四六歩▲六三銀は何れも戰闘の準備でありますが、此時上手方の四五に居る金はグヅ〳〵して居ては下手に三二飛と廻はられ次に四四歩と突かれて殺されますから五筋を見棄て▲三四金と歩を取つて進み▲三二金と防がせます此處で下手から五筋より攻められては上手方銀一枚で防戰が出來ませんから▲四七玉と上つて玉將自身に戰線へ出ます上手は飛、角がないから玉將も戰はすに居られません、之に反し下手は飛、角がありますから居玉で萬一の危險を冒す必要がありませんから先づ▲六八玉と採つて追々と多傳の定跡駒組みに移ります▲四五歩と突ひて一つには四四歩で角道を留め一つには四六へ銀をくり出し次に下に居る銀を五七へ出て五筋を防禦する事の出來る準備を爲します下手方は機のやゝ熟したるを見て五五歩と突ひて飛車道を通すの策戰をいたします▲同歩は致しかたがありません▲同飛も手凝であります▲五六歩▲五九飛は萬一銀の替つた時に四九銀と打た

せぬためにズット引ひたのであります(先)三六歩は桂を戰線に利用する準備であります(後)七二玉(先)三七桂(後)六二金で卽ち下手方多傳の駒組となつたのでありまして前章に花崎氏の申された以下多傳の指しかたでよろしいのであると云ふのが之れから先きのことであります卽ち前章花崎氏の五五歩を同角と取つて後の戰ひと大略同じことゝなるのであります

(後)四二金卽ち多傳の局面

持駒 上手歩 下手歩

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香	桂			飛			桂	香	一
		玉	金			金	角	歩	二
歩	歩		銀		歩		歩		三
			銀			金			四
		歩	歩		歩				五
	歩			歩		歩			六
歩		歩	歩	銀		桂		歩	七
			銀						八
香	桂							香	九

之れよりいよ〳〵戰鬪に移りまして上手方は敵の比較的陣地の薄き角頭より攻擊するために(先)二六歩と突きます下手方も角を利用するため七筋攻擊の目的を以て(後)七三桂と飛びます(先)二五歩は前の含みの通りである下手方は角頭へ迫られ上手より二四歩、同歩、二三歩と打たれて角を三一へ引ひては折角に狙つた七筋へ角が通りませんから角を一一へ引く準備に(後)一二香と上つて居ります之で下手の角頭も急に破れませんから(先)一六歩と突ひて援兵をくり出します之は敵の左側攻擊の意味ばかりでなく萬一の時に上手の玉を敵地へ入玉にする時の用意であります下手方(後)八四歩と突きます之も一面には上手の左側攻擊の準備ともなり又一面には下手の玉を廣くするためともなり宜しき手であります(先)一五歩は前の一六歩の意味を一層進めたものであります此時下手方は最早駒組みが十分に出來上りましたから何時までも模樣を見て居られませんから飛、角二枚ある强味を以ていよ〳〵挑戰をいたす覺悟で(後)七六歩と突きかけます上手方は之に對して數通りの防禦

手段があります

(先)七六歩の局面

持駒 上手歩 下手歩

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香				飛			桂	香	一
			金			金	角	歩	二
歩		桂	銀		歩		歩		三
			銀			金			四
	歩		歩		歩				五
		歩		歩		歩			六
歩		歩	歩	銀	玉	桂		歩	七
		金	銀						八
香	桂							香	九

第一 (先)八七金(後)七七歩なる(先)同桂(後)七六歩で上手方同金と取れば七五歩と打たれて上手の金は死にますから此歩は取れず結局上手は桂損となります因て初めに下手の七七歩なるを(先)同銀と取つて見ますと矢張り(後)七六歩と打ちます此歩は取ると前の通り七五歩で殺されますから(先)八八銀と引きます(後)八五歩(先)同歩(後)八六歩で上手方終に銀を取られて角を化れますから結局負けとなります然れば最初に下手が七六歩と戰端を開ひて來た時に上手方の八七金上りは不結果でありましたから更らに第二の防禦方法を說きます

第二 下手の(後)七六歩に對し(圖面の處)上手方(先)四六銀と指して次に五筋で角道を留める準備をいたします下手方は其暇を與へずに矢張り(後)七七歩なると指します(先)同銀(後)七六歩(先)八八銀(後)六六歩(先)同歩(後)同角(先)五七銀引(後)同角(先)同玉(後)五五歩(先)六七金(後)六五桂(先)四七玉(後)五六歩(先)同金(後)五八銀(先)四六玉(後)五六飛で之を同玉と取れば五五金で詰みますから取れませんで三五玉と逃げた處が最早や如何ともする事が出來ませんでつまり上手の負けであります因て最初下手方の七六歩の時に上手方四六銀の第二の策も無効でありましたから更らに第三の策を說きます

ことゝいたします卽ち本筋を說のであります

前章に於きましては二枚落ち下手方多傳の駒組み卽ち始めより申しますれば

△五六歩▲三四歩△五八金右▲六四歩△五七金▲六五歩△四六金▲七四歩△七八金▲七五歩△四八銀▲五四歩△四五金▲五二飛△八六歩▲四二銀△四八銀▲五三銀△五七銀右▲六四銀△五八玉▲六二銀△四六歩▲六三銀△三四金▲三二金△四七玉▲六八玉△四五歩▲五五歩△同歩▲同飛△五六歩▲五九飛△三六歩▲七二玉△三七桂▲六二金△二六歩▲七三桂△二五歩▲一二香△一六歩▲八四歩△一五▲七六歩

右の七六に對し上手方は第一八七金、第二四六銀と二樣の防ぎをして見ましたが何れも不結果に了りましたから今度は上手△四四歩と防ひで見ます之れが卽ち本手の防禦策でありまして此場合は上手方としては此四四歩が最善を盡した防ぎかたであります最も二枚落た將棋でありますから之れで上手が勝つと云ふことは出來ませんが防禦上之れを最善といたすのであります卽ち左に手順を說明いたします

卽ち上手の四四歩を下手方は同歩と取ろ手と同角と取る手があります、而して之を同歩を取りては折角の角道が塞りますので英斷に出て角にて取るのが宜ろしいのであります卽ち▲同角△同金▲同歩と云ふ手順になりますが此場合角を切つても上手より打ち込む處がありませんから更らに差支へはありません上手方此で四六歩と打つて置くのが玉頭が固たいやうでありますが其必要はありません因て△七六歩と敵の歩を取る▲五五歩と打ち歩と銀と共同して敵玉に迫らんといたします此歩を捨て置けば次に五六歩と取り込まれ次に五五銀と進まれては上手方次第に壓迫さるゝ計りでありますから此五五歩打ちを△同歩と取ります▲四五歩と進みます之も捨て置けば玉頭へ懸られますから此四五歩を△同桂と取るより外ありません▲五五銀と進みます此處で上手方が五六歩と打つても下手から四六歩と打たれ同銀と取れば五六銀と進まれて忽ち苦戰に陷ちいります又五六歩と打たずに四六歩と玉頭を防いでも下手より五六歩と打たれ四二銀と引けば下手より四四歩と打つて桂を殺し順次に攻められ到抵防ぎ切れません

因つて此處上手方は敵の五五銀に對して一と先づ△五二歩と打ち▲同飛、△五三歩にて飛先きを留めます下手方此處で飛を四二へ逃て居は上手に四六歩と打ち玉頭を守られますから飛車は其まゝにして置て▲四六歩と玉頭へ打ちます上手方△同銀と取るより外ありません▲五六金△五二玉の次に此處で▲四二飛と逃げながら幸便に後に桂に當る事といたします此處で上手方は五五銀と敵銀を取る手もありますが然る時は下手は同金と銀を取つて居ては後れますから四五飛と桂を取つて出るのであります、故に上手は之を恐れて五五の銀を取りませんで△四七歩と打つて銀を擊ぎます下手方は▲四六銀と銀を取つて出る△同歩は手順であります此處下手方五七歩と打つ手もありますが上手が同銀と取つてくれゝばよろしきも當らず觸はらず六九玉と逃げられては早く玉を逸しますから五七歩と打つは面白からず▲四七銀と打ちます△六九玉は致し方ありません此處で▲五七歩と打つてと金で敵銀を取るの策戰をいたします△七七銀と逃げ越すより外ありません、それでも下手方は▲五八歩なると指してと金を作つて置きます△七九玉は是非がありません▲六六歩と指します之を上手方同歩と取ると下手は六七歩と打ち又もと金を作つて歩計りで上手の金銀を殺す手順となります上手は此六六歩を同歩と取る手なく又之を六六銀と歩を取つても同金、同歩、六七歩で矢張り下手がと金を作くる手順となります依つて上手は△二二玉と逃げ越して見ます、▲六五桂と飛び此後は下手に種々の手があります卽ち上手の模樣により五七と引ひて指す手もあり七七桂となる手もあり而して桂を渡した後には上手より七五桂と打たるゝ防ぎに七四歩と打つて置く手も必要であります何れにしても下手は急に攻められる恐れはありませんから五七と引ひた後は五八銀なると指し更らに六八と突つ込む手もありまして此上は何しても上手は防禦の術がありません、又上手に銀角がありまして下手の六五桂の時に上手から五一へ角か銀を打たれましても飛車を逃げるに及びません飛角交換しても又銀と飛を替つても却て攻め道具が殖ます

香車落

香車落ちの將棋は二段違ひの手合であるが右香落ちは二段だけの差を認めがたくて之れは上手方の利益であることは一般に認められて居るのである、元來香車落ちの將棋は二段の差となつて居ても下手が少し油斷の手がある時は却つて平手よりも指し惡き定跡があるので香を落されて指し分けに指せれば平手でも三番の中には一番は勝てる腕前を認められるのである、況して右香となれば上手は右に飛車が居るので下手が端の香の傷みよりせめるのに頗ぶる困難であるから一層上手に利益の駒割りとなるので到底二段の差は認められぬのである、故に當今では右香落ちは殆んど指す人が稀れであつて大抵は左香落ちのみである、故に此編では右香落ちを略して左香落ちのみを出すことゝいたした、而して左香落の定跡は下手は居飛車で上手は飛車を左の三筋卽ち七八へ廻りて指すのが普通であつて時には上手が飛車を四間、又は五筋卽ち中飛車に廻るのがあるが何れにしても先づ七六歩、三四歩、六六歩と上手は角道を留めるのであるが之れ等の普通定跡は後に讓りて此に先づ奇拔のはめ手を御覽に入れることにいたさう

左香落　はめ手

左香落ちの定跡は始めに上手方が七六歩と突きいた時に下手方も三四歩と突いて角道を通ふすのが普通であります之れは上手で角道を留めずに置けば直ちに下手より角を替へて行くも上手には打ち込み處がないが下手では上手の左に香の無いのを付込みで角を敵の陣地へ打ち込む隙きがある爲めであります、然れば上手は角を替られては損であるから六六歩と突ひて角道を留めるのが定跡であります、次に下手方八四歩と突ば上手は七八へ飛車を廻つて七筋より仕懸ける準備として七五歩と突くのが同じく定跡の順序であります、然るに此に一つのはめ手の指し方があります、之れも花崎五段が得意の手で始めは之にはめられて失敗した人

六枚落より四枚落まで

六枚落より四枚落までの將棋は昔は餘り指さなかつた事と思ひます、それ故に故人の棋譜中に此の將棋は少しも出て居りません、されば元祿年間より嘉永年間に至る迄の將棋定跡書類が數十種ありましても何れも二枚落にて止まり六枚落より四枚落の定跡は誰れの書にも出て居りません

しかるに天野宗歩が盛んに將棋道を鼓吹した結果此の六枚落以下四枚落までの將棋も專ら行はるゝ事となつたものと見えまして始めて六枚落、五枚落、四枚落將棋の定跡が出來ました將棋はじまつて此方始めての事であります、何を申しても天才縱横の天野氏の事でありますから上手方に於ても最善の方法を組立て之れに對して下手方は理詰めにやつて行くと云ふ定跡であります、上手方は飛、角、桂、香と云ふ肝腎の飛び駒が無く下手方は一切の武器を備へて居りますので理詰めに指しさへすれば敵を破り得ん事はありません

しかるに下手は敵に飛び道具の無きを侮つて一潰ぶしに致さんと無理に攻めかゝりますと敵も最善の防禦法を立てありますので破れる樣で破れませんゆゑに下に出します定跡をよく研究して理詰めに指してゆけば六枚落等は下手必勝のものであります

しかし近年上手が下手をはめる差し方なども出來ましたから定跡以外に注意すべき點もあります、例令へばはじめに上手が七八玉と上るのははめ手の下地でありまして次に下手が三四歩と角道を開けますと上手はわざと七六歩と突きます、下手は之れは上手の見落しと考へまして大よろこびで九九角なると指しますと、上方は八八銀と上つて角の逃げ道をふさぎますそこで下手は九八成角と引きますと上手は七九金と寄ります此の次には八九金と寄つて厭やでも應でも金、角の交換をされる事になります、斯樣に始めから上手に角をもたれては下手は指す事が出來ませんこうゆう事がありますから定跡を研究の傍上手が定跡外に出た時の野心を測らねばなりません

欠

五枚落は一方へ桂馬が加はりますので其の方はすて置いて桂馬のない方から攻めるのが定跡であります、しかる時は六枚落同様の結果となりますから此れも左に出します定跡をよく研究致しますれば理詰めに上手を破る事が出來ます

＊

四枚落は兩方に桂馬が加はりますので此れを攻める事も六ケ敷なりますがそれとても飛、角、桂、香と云ふ飛び道具が無いのでありますから下手が理詰めに定跡によつて指しますと上手は防げぬ道理でありますしかし此の定跡は仲々複雜いたしますから左に十番を出して置きますよく呑み込んで其の時にまごつかぬ樣に暗記しをくのが肝要であります

變化の際は初心者に於てそれ迄の駒組を記憶し難く始めより一々並べなほすの手數あれば毎局變化毎に圖面を出して便利に備へ置きます

六枚落指方第一

第一圖（先）六八金ノ圖（春）

（先）四八金　（後）三四歩　（先）六八玉　（後）四四角　（先）二八銀
（後）一四歩　（先）三六歩　（後）一五歩　（先）四六歩　（後）五四歩
（先）三七金　（後）一六歩　（先）同歩　（後）同香　（先）二六金
（後）一二飛　（先）一五歩　（後）二六角　（先）同歩　（後）一八香成
（先）三七銀　（後）一五飛　（先）七六歩　（後）一七飛成　（先）四八銀
（後）二八成香　（先）五八金　（後）三八成香　（先）四七銀　（後）三七成香

（先）五六銀　（後）一八銀　（先）七八銀　（後）四八成香　（先）六九銀
（後）五八成香（春）　（先）同銀　（後）七八金打　（先）同玉　（後）五八銀
（先）六八金　（後）六九銀　（先）七七玉　（後）六八銀

如此にて下手方勝也

（春）六八金の時

（先）六八香　（後）八八銀　（先）六六角（夏）　（後）七九金　（先）八八玉
（後）六八銀（春）　（先）九九玉　（後）九八香打也
（先）六八金又は（後）六八香のどちらの合もせず七七玉と上る時は五七銀にてよろし

第二圖（先）六六角ノ圖（夏）

（夏）六六角の時

（先）八八玉　（後）六八銀　（先）七八銀　（後）七七金にてよろし

六枚落　第二

（先）三八金　（後）三四歩　（先）七八金　（後）四四角　（先）二八銀
（後）一四歩　（先）五八玉（春）　（後）一五歩　（先）二六歩　（後）同角
（先）三六歩　（後）一六歩　（先）二七金　（後）四四角　（先）一六歩
（後）二四歩　（先）二六歩　（後）二二飛　（先）四六歩　（後）五四歩
（先）三七銀　（後）三三桂　（先）五六歩　（後）一七歩打　（先）六八銀
（後）一八歩なる　（先）五七銀　（後）一七と　（先）同金　（後）二五歩
（先）四七玉　（後）二六歩　（先）二八歩　（後）二五桂　（先）一八金
（後）一六香也（春）

（先）五八玉の時　上手方

（先）六八玉　（後）一五歩（夏）　（先）二六歩　（後）同角　（先）二七金
（後）四四角　（先）七六歩　（後）九九角なる　（先）八八銀　（後）九八る
（先）七九金　（後）八四歩　（先）七八玉　（後）八五歩　（先）八九金
此指方は下手方惡しく（先）七六歩（夏）と上手より角道を明る時は（後）九九角なる事惡しく（先）七六歩（夏）の時
（後）二四歩　（先）三六歩　（後）二五歩　（先）三七銀　（後）二二飛

第三圖(先)五八玉ノ圖(春)

(先)四六歩 (後)五四歩 (先)三五歩 (後)同角にて下手方よろし

(先)七八金の時

(先)六八玉 (後)四四角 (先)二八銀 (後)一四歩 (先)三六歩
(後)一五歩 (先)二六歩 (後)同角 (先)二七金 (後)四八角なる
(先)三七金 (後)四九る (先)五九金
右の手順があるから四八角と成るべからず

六枚落 第三

(先)三八金 (後)三四歩 (先)六八玉 (後)四四角 (先)二八銀
(後)一四歩 (先)三六歩 (後)一五歩 (先)四六歩 (後)五四歩
(先)三七金(春) (後)一六歩 (先)同歩 (後)同香 (先)二六金
(後)一二飛 (先)三七銀 (後)一七香なる (先)一五歩 (後)二六角
(先)同銀 (後)二七成香 (先)二五銀 (後)一五飛 (先)三四銀
(後)一八飛なる (先)五八金 (後)四七金打 (先)六九金打 (後)六九角
(先)五八金 (後)同角 (先)三七成香(春)如此にて下手方よろし

(先)三七金の時

(先)二六歩 (後)同角 (先)二七金 (後)五三角 (先)八八銀
(後)九四歩 (先)七八金 (後)九五歩 (先)八六歩 (後)同角
(先)八七金 (後)五三角 (先)七六金 (後)八四歩 (先)七七銀
(後)八五歩 (先)七八玉 (後)八六歩 (先)八八金 (後)九三桂
(先)三七銀 (後)八五桂 (先)六六銀 (後)八七歩なる如此にて下手方よろし

五枚落 左桂一

(先)八八銀 (後)九四歩(春) (先)七八金 (後)九五歩 (先)六八玉
(後)九二飛 (先)五八金(春) (後)九六歩 (先)同歩 (後)同飛
(先)九七歩 (後)九四歩 (先)八六歩 (後)九六歩 (先)八七金
(後)九七歩なる (先)同金 (後)二四飛 (先)二八銀 (後)九七香
(先)同銀 (後)三八金 (先)二六香打 (後)九四飛 (先)九六歩

(後)二四歩如此にてよろし

(先)五八金(春)の時 上手方

(先)三八金 (後)九六歩 (先)同歩 (後)同飛 (先)九七歩
(後)九二飛 (先)八六歩 (後)八四歩 (先)八七金 (後)八二飛
(先)七六歩 (後)三四歩 (先)七七銀 (後)七二銀 (先)六六歩
(後)九七歩なる (先)同金 (後)二四飛 (先)二八銀 (後)九七香
(先)同銀 (後)三八金 (先)二六香打 (後)九四飛 (先)九六歩
(後)二四歩如此にてよろし

第四圖(先)五八金ノ圖(春)

(先)三八金 (後)九六歩 (先)同歩 (後)同飛 (先)九七歩
(後)九二飛 (先)八六歩 (後)八四歩 (先)八七金 (後)八二飛
(先)七六歩 (後)三四歩 (先)七七銀 (後)七二銀 (先)八七金
(後)九七歩なる (先)同金 (後)二四飛 (先)二八銀 (後)九七香
(先)同銀 (後)三八金 (先)二六香打 (後)九四飛 (先)九六歩

(先)五八金(春)の時 上手方

(先)三八金 (後)九六歩 (先)同歩 (後)同飛 (先)九七歩
(後)九二飛 (先)八六歩 (後)八四歩 (先)八七金 (後)八二飛
(先)七六歩 (後)三四歩 (先)七七銀 (後)七二銀 (先)六六歩
(後)八三銀 (先)七五歩 (後)七四歩 (先)同歩 (後)同銀
(先)六七玉 (後)八五歩 (先)同歩 (後)九六歩打 (先)同歩
(後)八五銀 (先)八六歩 (後)九六銀 (先)同金 (後)同香
(先)九四歩打 (後)九二歩打 (先)七四歩打 (後)七二金 (先)四八銀
(後)九七香なるにてよろし

五枚落 左桂二

(先)八八銀 (後)九四歩 (先)七八金 (後)九五歩 (先)八六歩
(後)九四歩 (先)八七金 (後)七二銀 (先)五八金 (後)八三銀
(先)七六歩 (後)三四歩 (先)七七銀 (後)七四銀 (先)六六歩
(後)八五歩(春) (先)六七金 (後)八六歩 (先)同銀 (後)六四歩
(先)五六歩 (後)六五歩 (先)五五歩 (後)同角 (先)五六金
(後)三三角 (先)五五歩 (後)二四角 (先)四六歩 (後)六六歩
(先)五八玉 (後)六二飛 (先)七七金 (後)八五歩 (先)七五銀
(後)同銀 (先)同歩 (後)六七銀 (先)四七玉 (後)五六銀なる
(先)同玉 (後)六五金 (先)四七玉 (後)五五金 (先)五八銀

第五圖 ㊀五六歩ノ圖（春）

持駒 上手 歩 下手 歩

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香	桂		金	王	金	銀	桂	香	一
飛							角		二
		歩		歩	歩		歩	歩	三
						歩			四
歩		銀	歩						五
	銀	歩	金	歩		歩	歩	歩	六
	金				歩				七
				玉		銀	桂		八
									九

手前上手　向下手

㊁四六金　㊀四八玉　㊁六七歩なる　㊀同銀　㊁同飛
㊀同金　㊁四七銀（春）　㊀五九玉　㊁五七金にてよろし
㊀五六歩の時
㊀七七金右　㊁八五歩　㊀七五銀　㊁同銀　㊀同歩
㊁八六歩　㊀同金左　㊁六六角　㊀六八玉　㊁七七角
㊀同玉　㊁六六金　㊀同玉　㊁八六飛
如此にて下手方よろし

五枚落　左桂三

㊀七八金　㊁九四歩　㊀八六歩　㊁九五歩　㊀八八歩
㊁八四歩　㊀八八銀　㊁七二銀　㊀八六歩　㊁八三銀
㊀七六歩　㊁三四歩　㊀七七銀　㊁七四銀（春）　㊀六六歩
㊁八五歩　㊀六七玉　㊁八六歩　㊀同銀　㊁六四歩
㊀八八歩　㊁六五歩　㊀七七銀　㊁六六歩　㊀同銀
㊁六五歩　㊀七七銀　㊁八五銀　㊀七五歩　㊁八六歩
㊀七五金　㊁同銀　㊀同玉　㊁六六金　㊀同銀
㊁同角
如此にて下手方よろし

第六圖 八六歩同銀ノ圖（春）

持駒 上手 歩 下手 歩

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香	桂		金	王	金	銀	桂	香	一
	飛						角		二
		歩	歩	歩	歩		歩	歩	三
		銀				歩			四
歩									五
	銀	歩	歩		歩	歩	歩	歩	六
	金		玉	歩	歩	銀			七
					金		桂		八
									九

手前上手　向下手

八六歩同銀の時
㊀八六金　㊁六四歩　㊀七五歩　㊁八五銀　㊀同金
㊁同飛　㊀八六歩　㊁八二飛　㊀七六銀打　㊁九六歩
にて下手方よろし

五枚落　右桂一

㊀三八金　㊁三四歩　㊀二六歩　㊁四四角　㊀二七金
㊁一四歩　㊀二八銀　㊁一五歩　㊀三六歩　㊁二四歩
㊀五八金　㊁二二飛　㊀三七銀　㊁三二銀　㊀四六歩
㊁五四歩　㊀四七金　㊁三三桂　㊀四八玉　㊁二三銀
㊀四五歩　㊁五三角　㊀四六金　㊁六二玉　㊀六八銀
㊁七二玉　㊀三五歩　㊁同歩　㊀五六歩　㊁三四銀
㊀五五歩　㊁四五桂　㊀二八銀（春）　㊁二五歩　㊀同歩
㊁三六歩　㊀同金左　㊁二五銀　㊀四五金　㊁三六銀
㊀三四金　㊁二七銀なら　㊀二三歩打　㊁二八銀なら　㊀二二歩なる
㊁二六角　如此にて下手方よろし

㊀同金左の時

第七圖 ㊁二五銀ノ圖（春）

持駒 上手 歩、歩 下手 歩、歩、歩

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香		銀	金		金			香	一
		王					飛		二
歩	歩	歩	歩		歩				三
				歩		角			四
				歩	桂		銀	歩	五
歩	歩	歩	歩			歩			六
			銀		玉		金		七
	桂						銀		八
									九

手前上手　向下手

先同金右　後二五銀　先三五金右　後三四銀　先二三歩
後同飛　先二四歩　後三五銀　先二三歩なる　後四六銀
如此にても下手方よろし

五枚落　右桂二

先三八金　後三四歩　先二六歩　後四四角　先二七金
後一四歩　先三六歩　後一五歩　先五八金　後二四歩
先六八玉　後二二飛　先二八銀　後二五歩　先同歩
後同飛　先二六歩　後同角　先同金（春）　後同飛
先五五角打　後二五飛　先三五歩　後五四歩　先三七角
後二六歩　如此にても下手方よろし

（春）五四歩の時　上手方

先一一角なる　後二八飛なるにてよろし
後五四歩の時下手方は　後四四金　先三七角　後二六歩と指すべし能々考有べし

五枚落　右桂三

先三八金　後三四歩　先二八銀　後四四角　先三六歩
後一四歩　先四六歩　後五四歩　先五八金　後五三角
先六八玉　後一五歩　先三七金　後二四歩　先八八銀
後一六歩　先同歩　後同香　先二六金　後一二飛

第九圖（先一四歩ノ圖（春））

持駒　上手　下手　歩、歩

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香	桂	銀	金	王	金	銀	桂		一
							飛	歩	二
歩	歩	歩	歩	角	歩		歩		三
				歩		歩			四
					歩		金	香	五
						銀	歩	歩	六
	歩	歩	歩	歩					七
	銀		玉	金					八
	桂								九

手前上手　向下手

先一五歩　後一八香なる　先三七銀　後二二飛　先三五歩
後同歩　先一四歩（春）　後二五歩　先一五金　後四二角
先一三歩なる　後同桂　先一四金　後三二飛　先四七金
後二二銀　先一三金　後同銀　先七六歩　後一七成香
先四五歩　後二七成香　先四六銀　後二四銀　先四四歩
後同歩　先五六歩　後一二飛如此にて下手方よろし
四歩の時（春）　上手方
先四七金　後一七成香　先一四歩　後二五歩　先一五金

後二七成香　先四八銀　後二六歩　先一三歩なる　後同桂
先一四金　後一二歩　先七六歩　後三八成香　先五九銀
後二七歩なる

四枚落　一

先四八銀　後九四歩　先五六歩　後九五歩　先五七銀
後九二飛　先七八金　後九六歩　先同歩　後同飛
先九七歩　後九四飛　先八八金　後九三桂　先八六歩
後八四飛　先八七金　後一四歩　先三八金　後一五歩

第十圖（先六六歩ノ圖（春））

持駒　上手　下手　なし　なし

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
香		銀	金	王	金	銀	桂	香	一
							角		二
桂	歩	歩	歩	歩	歩	歩		歩	三
									四
							飛		五
	歩		歩	歩					六
歩	金	歩		銀	歩	歩	歩	歩	七
	銀			玉					八
歩	桂								九

手前上手　向下手

先二八金　後九八歩　先八八銀　後一四飛　先六六歩（春）
後一六歩　先同歩　後同飛　先一七歩　後一四飛
先四六歩　後一三桂　先二六歩　後二四飛　先二七金
後一八歩　先三六歩　後一九歩なる　先三七桂　後一八と
先一六歩（春）　後二八と　先一七金如此にて下手方よろし
六六歩の時　上手方
先四八玉　後一六歩　先同歩　後同飛　先一七歩打
後一四飛　先四六歩　後一三桂　先二六歩　後二四飛
先二七金　後一八歩打　先三六歩　後一九歩なる　先三七桂
後一八と　先一六歩　後二八と　先一七金　後三二銀
先六六歩　後五六歩　先四七玉　後三一角　先四五歩
後五三角　先三五歩　後同角　先四六銀　後二六角
にて如此下手方よろし

四枚落　二

先四八銀　後九四歩　先五六歩　後九五歩　先五七銀
後九二飛　先八八銀　後九六歩　先同歩　後同飛
先九七歩　後九四飛　先三八金　後一四歩　先六八玉
後一五歩　先二六歩　後一六歩　先同歩　後一八歩
先三六歩　後一九歩なる　先三七桂　後一六香　先二七金
後一四飛　先三五歩　後一七香なる　先三六金　後二七成香

第十一圖先七七玉ノ圖(替)

持駒　上手　歩　下手　歩

先七六歩　後一八飛成　先(替)七七玉　後三四歩　先六六銀
後三五歩　先同金　後三七成香　如此にて下手方よ
ろし

(替)七七玉の時

先五八金　後三四歩　先六六銀　後三五歩　先四六金
後三七成香ノ先五五歩　後三六成香先五六金後四七成香
此如にて下手方よろし

四枚落　三

先四八銀　後九四歩　先五六歩　後九五歩　先五七銀
後九二飛　先八八銀　後九六歩　先同歩　後同飛
先九七歩　後九四飛　先七八金　後一四歩　先三八金
後一五歩　先二八金　後(替)九三桂　先八六歩　後九六歩打
先八七金　後九七歩成　先同銀　後六八歩　先七六歩
後三四歩　先六六歩　後九七歩成　先七七桂　後九八と

第十二圖先九七銀ノ圖(替)

持駒　上手　歩　下手　歩

先九六銀　後八八と　先九七金　後七八と　先八五桂
後同桂　先同歩　後七七と　先九五歩　後四四飛
先四六銀　後同飛　先同歩　後六六角　如此にて
下手方よろし

(替)先九七銀之時

先九七金　後六四飛　先五八玉　後八五桂　先八七金
後九二香成　先八五歩　後八九成香　先九七銀　後七五桂打
如此にて下手方よろし

四枚落　四

先四八銀　後九四歩　先五六歩　後九五歩　先八八銀
後九二飛　先五七銀　後九六歩　先同歩　後同飛
先九七歩　後九四飛　先三八金　後(替)一四歩　先六八玉
後一五歩　先二八金　後九三桂　先七八玉　後八五桂
先六八金　後九八歩　先八六歩　後九七歩成　先同桂
後九九歩成　先同銀　後九七飛成　先八八銀　後九八龍
先九九歩打　後九四龍　先六六歩　後八四歩　先三六歩
後八五歩　先同歩　後七五桂　先七六歩　後八七歩
先七七銀　後九九龍　如此にて下手方よろし
(替)七八玉の時

第十三圖先七八玉ノ圖(替)

持駒　上手　なし　下手　歩

先七八金　後八五桂　先八六歩　後九七桂成　先同銀
後九六歩　如此にてよろし

四枚落　五

先四八銀　後五四歩　先七八金　後九五歩　先八六歩
後八四歩　先八七金　後一四歩　先三八金　後一五歩
先二六歩　後一六歩　先同歩　後(替)同香　先一七歩打
後同香　先同桂　後一六歩　先二五桂　後一七歩成
先五六歩　後三二銀　先三六歩　後三四歩　先三七金

第十四圖 先二五桂ノ圖（春）

持駒 上手 香 下手 歩

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂	
	飛		歩	歩	歩		角	
		歩					歩	
歩							桂	歩
	歩		歩	歩	歩			
	金	歩			歩	歩		
					銀	金		
	桂	銀		玉				

手前上手　向下手

歩二四歩　先三五歩　歩二五歩　先三四歩　歩七五桂

先七六金　歩六七桂なる　先六八玉　歩七九桂なる　先同玉

歩九六歩　先同歩　歩九八歩如此にて下手方よろし

四枚落　六

先四八銀　歩九四歩　先七八金　歩九五歩　先八六歩

歩八四歩　先八七金　歩一四歩　先三八金　歩一五歩

先二六歩　歩一六歩　先同歩　歩同香　先一七歩

歩同香なる　先同桂　歩一六歩打　先一九香　先一七歩なる

先同香　歩一三歩打　先七六歩（春）　歩三四歩　先八八銀

歩九六歩　先同歩　歩八六歩　先七七金　歩九三桂　先九六香

歩八五桂　先七八金　歩九七歩　先九九香　歩八七歩なる

先同金　歩七七桂なる　先同桂　歩同角　先同金

歩八八飛なる　先六八角　歩七九銀如此にて下手方よろし

七六歩の時（春）

先八八銀　歩七二銀　先七六歩　歩三四歩　先七七桂

第十五圖 先七六歩ノ圖（春）

持駒 上手 歩 下手 桂

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂	
	飛						角	
		歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩								
	歩					歩		
	金	歩	歩	歩	歩		歩	香
					銀	金		
	桂	銀		玉				

手前上手　向下手

第十六圖 先六六銀ノ圖（春）

持駒 上手 歩 下手 桂、歩

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香							桂	香
	飛						角	
		歩	歩	歩	歩	歩	歩	
歩								歩
	歩	銀						
	金		金	玉	金	銀		
		玉			銀			

手前上手　向下手

歩八三銀　先五六歩　歩七四銀　先五七銀　歩九三桂

先六六銀　歩五八歩　先七五歩　歩六六角　先同歩

歩七五銀　先八五桂　歩同桂　先五五角打　歩六四銀

先一一角なる　歩九七桂なる　先同銀　歩九六歩　先八八銀

歩九七歩なる　先同銀　歩同香　先同金　歩五七銀打

先四八金　歩四五桂如此にて下手方よろし

四枚落　七

先四八銀　歩九四歩　先七八金　歩九五歩　先八六歩

歩八四歩　先八七金　歩一四歩　先三八金　歩一五歩

先二八金　歩七二銀　先八八銀　歩八三銀　先六八玉

歩七四銀　先七六歩　歩三四歩　先七七桂　歩九三桂

先七八玉　歩八五歩　先同歩　歩同桂　先八六歩

歩七七桂なる　先同銀　歩九六歩　先同歩　歩六五桂

先六六銀（春）　歩八五歩　先同歩　歩同銀　先六五銀

歩九九角なる　先八八歩　歩九六銀　先七七桂打　歩八五銀なる

先同歩　歩九二飛　如此にて下手方よろし

六六銀の時（春）

先六六桂打　歩七七桂なる　先同金　歩九六香　先七四桂

歩同歩　先六六歩　歩九七香なる　如此にて下手方よろし

四枚落　八

先四八金　歩九四歩　先五六歩　歩九五歩　先五七金

歩九二飛　先八八銀　歩九六歩　先同歩　歩同飛

先九七歩　歩九四飛　先七八金　歩一四歩　先五八玉

歩一五歩　先二八銀　歩九三桂　先八六歩　歩九六歩（春）

先八七金　歩九七歩なる　先同金　歩一四飛　先九六歩

歩一六歩　先同歩　歩同飛　先一七歩　歩一四飛

第十七圖（先）九六歩ノ圖（春）

（先）八七金　（後）一三桂　（先）二六歩　（後）一八歩

如此にて下手方よろし（春）

九六歩の時

（先）四六歩　（後）一六歩　（先）同歩　（後）同飛　（先）一七歩

（後）一四飛　（先）四七玉　（後）一三桂　（先）二六歩　（後）一六歩

（先）三八玉　（後）一七歩なる（先）同銀　（後）一八歩打（先）二八玉

（後）一九歩なる（先）同玉　（後）八五桂　（先）同歩　（後）九七香なる

（先）同銀　（後）二五桂　（先）同歩　（後）一七飛なる（先）同桂

（後）同香なる　（先）五八飛　（後）二七桂如此にて下手方よろし

四枚落　九

（先）四八銀　（後）九四歩　（先）五六歩　（後）九五歩　（先）五七銀

（後）九二飛　（先）六八玉　（後）一四歩　（先）三八金　（後）一五歩

（先）二八金　（後）九六歩　（先）同歩　（後）同飛　（先）九七歩

（後）九四飛　（先）八八銀　（後）九三桂　（先）八六歩（後）九六歩打

（先）七八玉　（後）九七歩なる（先）同銀　（後）九八歩打（先）八八玉

（後）九九歩なる（先）同玉　（後）一三角　（先）四六歩　（後）八五桂

第十八圖（先）六六銀ノ圖（春）

（先）同歩　（後）九七飛なる（先）同桂　（後）同香なる　（先）八九玉

（後）六五桂打（先）六六銀（春）　（後）四六角　（先）四八飛　（後）九八銀

（先）同飛　（後）同成香　（先）同玉　（後）四八飛打（先）八七玉

（後）二八飛なる（先）六五銀　（後）二九銀（先）五九香打（後）五七角なる

（先）同香　（後）六九銀（春）　如此にて下手方よろし

六六銀の時

（先）六八銀　（後）九八銀打（先）七九玉　（後）八七銀なる（先）五八金

（後）八八成香（先）六九玉　（後）七八成香（先）五九玉（後）六八成香

（先）同金　（後）四六角　如此にて下手方よろし

四枚落　十

（先）七八金　（後）九四歩（春）　（先）七六歩　（後）三四歩　（先）八八銀

（後）九五歩　（先）七七金　（後）九三桂　（先）八六歩　（後）八四歩

（先）六六歩　（後）八五歩　（先）同歩　（後）同桂　（先）七八金

（後）九六歩　（先）同歩　（後）九七歩　（先）八七銀　（後）六六角

如此にて下手方よろし（春）

七七金の時

（先）七七銀　（後）八四歩　（先）四八銀　（後）一四歩　（先）三八金

（後）一五歩　（先）二八金　（後）八五歩　（先）五六歩　（後）七二銀

（先）五七銀　（後）八三銀　（先）五八玉　（後）八四銀　（先）六六歩

第十九圖（先）七七金ノ圖（春）

（後）九二飛　（先）六九玉　（後）九六歩　（先）同歩　（後）同飛

（先）九七歩打（後）九二飛　（先）八八金　（後）六四歩　（先）三六歩

（後）七四歩　（先）二六歩　（後）六二飛　（先）二七金　（後）七三桂

（先）三七桂　（後）六五歩　（先）二五歩　（後）九八歩　（先）同金

（後）六六歩　（先）同銀右　（後）同角　（先）同銀　（後）六五歩

（先）五七銀　（後）六六銀　（先）五八玉　（後）五七銀（春）なる（先）同玉

（後）六六歩　（先）六八歩　（後）六五桂　（先）四八玉　（後）五七銀

（先）三八玉　（後）五八銀なる（先）二六金　（後）五七桂なる如此にて

下手方よろし

（春）四八玉の時

先六六玉　後五七銀　先六六玉　後九七香なる先同金

後六六歩　先七八玉　後五八銀なら先六九香　後五七桂なる

如此にて下手方よろし

但し七七銀が上る手は手將棋ゆへ能く勘考有てかたく守りて指べし

將棋の秘訣終

大正九年十一月廿八日印刷
大正九年十二月　五　日發行

花外逸人編

〔特價壹圓貳拾錢〕

發行者　東京市麹町區山元町二丁目八番地　梅田太一

印刷者　東京市京橋區新榮町四丁目三番地　高橋赤次郎

印刷所　東京市京橋區新榮町四丁目三番地　高橋活版所

發行所　東京市麹町區山元町二丁目八番地　平和堂

不許複製

297
78

終